

323
446



始



著原 フ ホ ン メ ザ ル ト ク ド
ア ヴ リ フ

譯共 郎 吉 次 原 川 士 學 法
暉 善 川 豊

語 際 國

と 質 本 の ト ン ラ ペ ス エ
學 文 ト ン ラ ペ ス エ

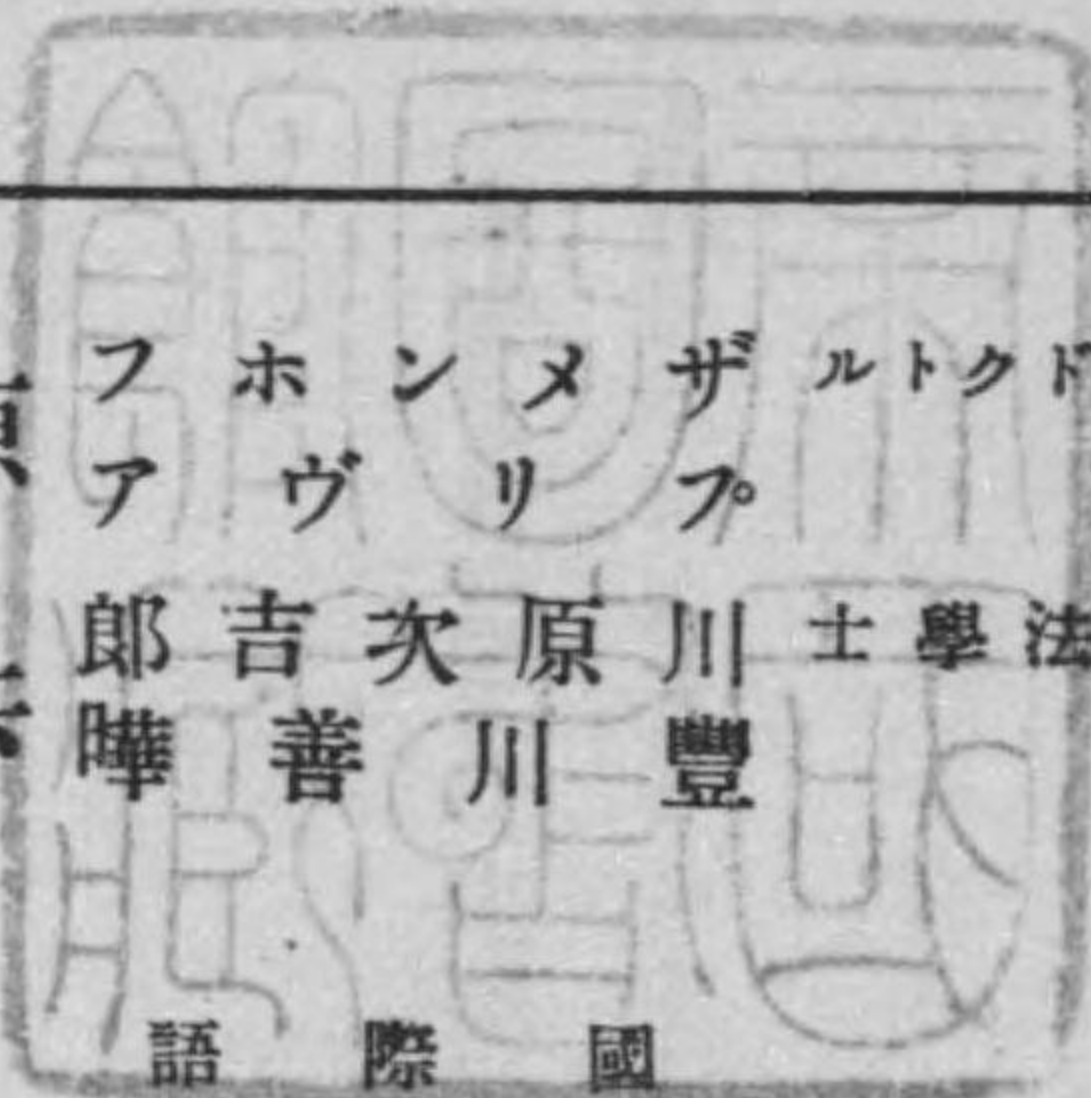


社 ト ン ラ ペ ス エ 本 日

1922

323-446

著原 フホシメザルトクド
アヴリフ
譯共 郎吉次原川士學法
暉善川豊



と質本のトンラペスエ
學文トンラペスエ



社トンラペスエ本日

1922
大正
11. 10. 19
内交



第十回日本エスペラント大会に當り

本書を新たに文化運動の第一線に立たんとする人々に贈る

譯者

小 序

人類の結合、世界の協同を基調として進まんとする今後一切の文化が人間相互の愛と理解との基礎の上に建設せらるべきことは苟も人間的良心と論理的頭腦を有つた者の悉く承認しなければならぬことであり、而して又 에스ペラント語が共同の國際補助語として用ひらるべきことは論ずる迄もないことである。

エスぺラント語及びエスぺラント文學は決して國語及び國文學を排して之に代らんとするものではなく、却つて國語及び國文學の缺點を補ひて完全なる人類文化を大成せしめんとするものである。

エスぺラントの宣傳は此の意味に於て實に現下の世界に於ける最大なる文化運動であり、最高なる人道實現である。随つて又吾々の此の細やかなる勞働の結果が我が文化事業の上に何等かの寄與をなし得ることは譯者兩人の最も光榮とする所である。

本書前編はエスぺラント語の創案者たるザメンホフ博士が一九〇〇年「ウヌエル」なる匿名を以て佛蘭西科學促進協會大會に送つた報告論文を有名なエスぺラントイスト

たるルイ、ドウ、ポトフロン氏の手によりて多少修正の上發表されたものであり、後編は現在生きて居る人の中では第一流のエスペランティストとして命名高きエドモンド、ブリヴァ氏が一九一一年安土府に於ける第七回萬國エスペラント大會の際フランダー、オペラ劇場でなせる有名な演説である。此の二論文は現在に於てエスペラントの本質及び其の文學の將來を知らんとする者にとりては無二の資料となつて居るものである。

譯者此の種の仕事に不慣の爲め折角の名篇を化して瓦礫となせる誤を受くべきは豫め覺悟する所である。

一九二二年十月、第十回日本エスペラント大會を前にして

日本エスペラント學會内にて 譯者 識

目次

前篇	エスペラントの本質と其の將來(ザメンホフ)……………一	頁
後篇	エスペラント文學論(ブリヴァ)……………八十一	頁

前篇 エスペラントの本質と其の將來

此論文は Zamenhof 博士の編著たる “Fundamenta Krestomatio” の中にある “Esenco kaj fonteco de la ideo de Lingvo Internacia” の全章を意訳したものである。原書には原文の筆者は S-ro Unuel であつて、それをひらき、L. B. aufront が一九〇〇年佛蘭西科學促進協會大會で多少の修正と省略の上講演したと注意書がしてあるが、本譯者にはザメンホフ著としておいた。それは譯者の推定する所ではこれは全然ザメンホフが書いたものでウヌエルといふのは Un el Esperantistoj の略稱であつて文章中の思想と云ひ語氣と云ひ到底餘人では出来ぬと思ふからである。尙左の箇所を参照せられたい。

- 一、Edmond Privat 著 “Vivo de Zamenhof” の一五〇頁。
- 二、同書一五四頁—一五五頁。
- 三、Zamenhof 著 “Jingvaj Respondoj” 七頁—八頁。

エスペラントの本質と其の將來

Esenco kaj fonteco de la ideo de Lingvo Internacia

- 一、緒論
- 二、國際語の必要
- 三、國際語の可能
- 四、國際語は何時採用さるか
- 五、如何なる國際語が採用さるか
- 六、如何なる人造語が共同使用に採用さるか
- 七、一層よき人造語の出現は可能か
- 八、結論

一、緒論

人類の歴史に於て、主要な役割を演ぜんとする思想は凡ていつでも同じ運命に遭遇する。即ちそれが初めて生れる時に、同時代の人は驚ろくべき頑迷な不信任のみならず、更に譯の解らない敵意をさへ之に向ける。随つて其の思想を信奉する先驅者達は、大に戦ひ又大に苦しむことを餘儀なくさせられる。世人は彼等を目して狂者となし、或は幼稚な愚者となし、果ては又全く有害な者とさへなすのである。然るに一方最も無目的な、無用な、無意味なことに従事して居る人でも

若しもそれが唯時の流行であり、民衆の傳統的な考に適合してさへ居れば、人生のあらゆる恩恵を享けるのみならず、又識者とか、有用な公的活動家とかいふ名譽な名前を受ける。之に反して新しい思想の先驅者は嘲笑と攻撃の外何も受けない。初對面の非常に無學な青二才ですら彼等を上から見下して彼等を愚な事に従へるものと云ふ。又初めて知つた雑誌の文藝記者は彼等に就いて頓智のある論説や記事を書くが、彼等の仕事を少しでも知らうとはしない。そして何時も喇叭吹の後から羊の群の様に附いて行く世の中の人々は、笑つたり、蔑んだりして一寸でも此等の頓智ある嘲笑の内に意味や論理の一滴でも有るかどうかといふやうな疑問を起すことさへしない。かうした思想に就いては、皮肉な無禮な冷笑を以て語る一般の習慣がある。であるから甲も乙も丙もそれに慣ふのである。彼等は皆少しも此の嘲笑されて居る思想に就いて眞面目に考へてみる事を怖れる。それは初めつから『愚なこと以外に何者をも内容しない』と思つて居るからである。又若しも彼れが此の愚事に一寸の間でも眞面目に對しやうとすれば、自分自身もどうかすると其れ等の愚者の中の一人に數へ入れられはしないかと恐れるからである。『此の現實的な時代に何うして其の様な馬鹿な空想家が現はれ、何うして彼等が癲狂院へ收容せられないのか』と人々は不思議に思つて居る。

併し乍ら時代は進む。若い空想家達は長い奮闘と苦惱の後に其の目的を達する。人類は一つの新しい重大な獲得をして一層豊富になり、其の中から最も廣大な各種の利益を誘出する。かくて事情は一變する。既に確立した新しき現象は人類に取つては極めて單純な當然なもの、様に思はれて來て、人類が何うしてそれなしに、數千年間も生きて來られたかといふ事が了解出來ない位になる。其の思想の生れ出づる時それを同時代の人々が如何に遇したかといふことを後進者が知る時に、彼等はそれは前時代の嘲笑の爲めに歴史家が此等の事を思ひ付いたのだとは斷じて思つて見やうともしない。彼等は云ふ。全世界が其の當時愚かなる者計りだつたのかと。眞實に斯かる無意義な反對を持つて先驅者に對した人が居たのかと。そして其の他の人々は黙つて居たのかと。何も知らない三尺の童子が其様な批評家に向つて斯う云つたかも知れない。『貴方は確かにとてつもない、何の根底もない馬鹿氣切つた事をおつしやる。其の反動は屹度貴方の鼻先に現はれて來ますぞ』と。誠に其通りである。歴史家と云ふものはよく誇張するものだ。

基督教の誕生の歴史を繙いて見よ。更に道德上、哲學上、或は科學上に於ける、各種の偉大な思想の誕生の歴史を讀んでみられよ。事情は總て同様である。『歴史は古くとも事實は常に新しい。』尤は遠方に有るものに取つては、必要であるが、近くに立てるものには、目を射て却つて

無くもがなである。印度への西方の道が有らねばならぬと云ふコロンブスの考がへは、現在の吾々に取つては、極めて單純な、そして當然な事に思はれる。けれども曾ては到底吾々には信ぜられない位であるが、次のやうな人さへ居たのである。其人達と云ふのは、地球が圓形である事を知つて居ながらもなほ、東からも西からもあらゆる國へ通ずる事が出来得る事や、而して此の未踏の西國には、吾々に未知の興味ある、陸地が有るだらうといふ事を、疑がつてゐたのである。其の當時コロンブスに對してなされた所の反對例へば、『誰もこれまで歐羅巴より西へ行つた者はない。であるから其様なことは不可能である。』『神は其様な事をする事を許した事はない。』『舟が沈んで、再び浮び上つて來る事が出来ないであらう。』など、云ふ——を讀む時に、吾々は本意ながら考へる。分別盛りの人間が其様なつまらない、現在ならばどんな子供でも赤面するやうな事を、よくも云へたものだ。併し乍ら其時代に於ては、此様な無邪氣な反對論が、眞理として認められて居り、常識界の最も論理的な意見として何等の疑問も挾まれなかつた。そしてコロンブスの思想は何等の注意に値しない兒戯に類する事とされてゐた。蒸氣の偉力と効能とが示された時に、如何に、分別ある人がそれに對して反對しやうとしたか。そして發明者は、多年の奮闘と艱難と嘲笑とを耐へ忍ばねばならなかつたか。遂に目的を達する事に成功し、英國に於ては

既にまる三年間も機關車が走り、大いなる効果を齎らしてゐた時に於いてすらも、歐羅巴大陸に於いては、知識階級の人々や、あらゆる學會までが、眞面目に調べて見もしないで、種々な精細な論文を書いて、機關車の構造は兒戯にすぎないとか、不可能な事であるとか、無益な事であるとかと云ふ、反對意見を發表してゐた。自分は自問する。此事は何を意味するか。これは萬人通有の流行病的愚かさであつたのか。或は其様な時代が一體本當に有つたのか。然り、斯かる時代が實際有つたのである。しかも今、それを知つて全く驚いてゐる吾々と雖ども、決して彼等よりも一層進んで居るとは云へない。吾々の子孫も亦恐らく、吾々より一層勝つて居ると云ふ譯でもなからう。併し甚だしく無意義な反對や攻撃をした此等の人々は、今こそ吾々にさう見へるけれども、決して馬鹿ではなかつた。彼等のあらゆる缺點はたゞ斯處處に有るに過ぎない。吾々各自の内に存在する先天的な而して精神的な惰性の爲に、彼等は生れ出づる新らしい現象に對して全く吟味しやうともせず、笑つて済ましたり、其様なことは不可能だと云ふ先入主に依りて事を判断しやうとしたり、又あらゆる議論を、現在の己れの議論は全然根據なきものであるにもかゝはらず、それには無頓着に無理にも自分の前の断定と一致させやうとしたり、そして、新らしい思想の擁護者の議論に對して、頑固な錠を以て其頭の口を閉めてしまつたりする。其れ

に、不可能だと凡ての者が認めやうとするのに對して、可能である事を證明せんとしやうと努むる。その議論は此等惰性的な人に取りては、兒戯に類するものとして思はれたに違ひない。それはあたかも現在の吾々に其時代の反對者が幼稚に見へるのと同じである。

同時代の人を取つては無内容な幻想としか思はれず、しかも後至者を取つては極めて當然なことにして、數千年間もそれなしに人間が何うして生きて來られたかを了解に苦しむ様な其等の思想と同じく、各民族間の交通の爲に共通語を採用しやうとする思想も亦、かゝる運命に屬して居たのである。吾々の後至者が歴史の中で人々や地上の王者達や、世界の代表的智識階級や、賢者達が、數千年間相互に了解しあふ事なくして、無關心に生存して居たと云ふ事を讀む時に、彼等にはきつと本當とは思へないであらう。そして彼等は言ふであらう。「此の爲には、吾々の先進者は何等超自然的な力を殊更必要としなかつたのだ。彼等各々は條件の付けられた一定の發音を有つて居る。それを以て全く正確に隣人達と了解しあつてゐるのに違ひない、であるのに何うして彼等の頭に、これらの一定の發音の中の一つを、萬人の相互了解の爲に採用することを決めやうと思ひ付かなかつたのだらう。既に文明人の大多數の間には、以前から一定の度量衡や、文字や樂譜が採用せられて居つたのと同じやうに」と。共通語の採用に就いて努力して居る眞面目な人々

を、同時代の人々が狂人だとか小僧だとか云つて、後指を指したりしてその名譽を無にしやうとする。又同時代の無能な者共が、是等の人々の事を雜誌の中ですきな程に冷評したりする。併し是等の人々には其等の低能者に向つて、「お前達には是等の思想が完成されるか否かの見分けが付くか。それは兎に角その思想の何ものたるかもよく知りもしないで、彼等を嘲笑する事は恥づべきである」と云つて詰問する者は誰も居なかつた。この事を、若し吾々の後至者が知る時、嗤かしく忿ることであらう。吾々の後至者は世人が國際語の思想に對して、就中人造語の思想に對してなした、無邪氣な反對を聞いた時に心から笑ふであらう。吾々も亦憐憫の微笑を以て、吾々の先祖を視る。彼等もおそらく數千年以前に人工的な文字の採用に對して識者然として絶叫し、反抗したであらう。併し乍ら我々の思想の表現の手段は組織的、自然的、歴史的（象形文字の如く）であつて、決して書齋で相談づくで作られるものではないのである。そして又吾々と同じく、後至者達も亦現代人を嘲笑の眼を以つて見ることであらう。その現代人といふのは、現代語はそれ自身何ら一定の方針もなく、全く盲目的に創製せられたものであるとは、決して一般の事情が言明してゐる所でないからとて、たゞそれだけの理由で以つて大膽にも「言語は人工的に作られるものではない。」と強言して居る人達である。今日迄はさうであつた。然し將來は決して斯くの如く

あり得ない。次世紀になつて十歳位の生徒が先生に向つてこんなことをいつて尋ねるかも知れない。目の前に其様な言語がちゃんと現存し、既に豊富な文献もあり、國際語に期待し得るあらゆる職能が實際的に完成して居るにも係らず、なほ人造語の存在の可能を否定するやうな人が實際あつたのか。其等の人達は常に愚にもつかない理屈をしやべる代りに目を開いて良く物事を觀察する必要があるのである。又一體、多くの分別盛りの人間がいつも民族の發音器官の相違といつたやうな言語學者の泣言のやうなことを云ひたがつてゐたといふのは本當なのか。一方には年若き人達が到る所で或民族の人達と他の民族の言語で非常に巧みに語り合つてゐるのにと。そして先生は答へるだらう。「それは確かに信じられないことである。併しこれまでは實際さうに違ひなかつたのだ。」と。

實に現代に於いては、國際語の問題に就いては、一般の慣習や精神的惰性が漸次健全な思慮に向つて進み始めたやうである。既に可なり以前から此處彼處に、各種の新聞雜誌に其思想それ自體に對して、或は國際語の爲めに働いてゐる人達に對して、其等を是認する記事が滿載されてゐる。併し乍ら、もつとも記者が世間的な不名譽を受けるのを恐れた爲めでもあらうが、これらの記事はまだ、随分臆病な控へ目なものばかりである。そしてこの氣力のない聲は悪口家の聲高

き合唱の裡に消えて行く。かくて、噂の高い方向にはかり行きたがる傾向の世間大多數の者は、國際語の思想などは未だほんの無意味な幼稚な空想に過ぎないと思ひ込んで仕舞ふ。實際世間の多くの人々は一番聲の大きい嘲笑者や攻撃者を賢者な勇者だと思ひ、そして被攻撃者は何でも悪人だとしてしまふ傾がある。かうした世間の人々を納得させやうとは吾々は思はない。何となれば、そんな人達に向つては何を云ても無益だからである。そして時の解決を待つより外はない。世間の人々は、今日その思想の先驅者達に泥を投げつけたそれと同じ群衆心理で、明日は又早速彼等の記念碑を建てることも敢て仕兼ねない。吾々の説く所は、獨立の判斷を以て吾々の思想に對することの出来る人にとつては常に一定不動である。併し乍ら雑多な世評に影響されるやうな人々は全く考へを中心を失つてしまつて、一體何れに依據すればよいのか解からなくなり、果ては一定した確信を得たいと望みつゝも、不斷の疑懼の裡に自分を苦しめることとなる。其様な人々の爲めに、吾々は茲に次の諸問題を解明するであらう。吾々、國際語思想の友は確實に或る理想の爲めに奮闘してゐるのか。又反對論者が強調してゐるやうに我々の運動は無益に終るといふ懼れがあるか。或は又吾々の目指す目的は明瞭に確定せるものでそして必然に到達し得べきものであるか。

讀者諸君よ。吾々は知つてゐる。諸君は從來一般の傾向として、引用句が一杯にあつたり、著名な權威ある人の名で埋まつてゐたり、又高踏的な似而非學者的な字句で光つてゐるやうなそんな議論でなければ尊敬して見やうとしなかつた。以下述べる所にはさうしたものが一つも見られないことを今から御断はりして置く。若しも諸君が有名な人の名の附いたものをのみ期待して置かれるならば、國際語に關する他の著書を何でも讀まれるやうにお勧めする。さうすれば國際語の思想の爲めに働いた多くの名譽と權威の兼備された偉らい學者達の名を見附けるであらう。併し乍ら茲では、あらゆる餘計な不用事は悉皆打捨て、唯、赤裸々な論理の名に於いて語るのである。偉らい名士の言ふ所にはばかり氣を取られず、よく自分自身で熟考せられよ。そして若し吾々の議論が正當であつたならばそれを採れ。又若し正當でなかつたならば、たとへその背後に幾千の名士が控へてゐるやうとも断然これを捨てなければならぬ。

そこで系統的に順を追ふて次の問題を解明して行くこととする。

- 一、國際語は必要なりや。
- 二、それは原則として可能なりや。
- 三、それは確かに實用され得る希望ありや。

四、何時、そして如何なる方法で、それが實行せられるか。又如何なる言語が採用せられるか。

五、吾々の現在の努力が或一定の目的に向つて進んでゐるか。又吾々の行動も亦盲目的で、その努力が無益に終るやうな懼れがないか。そして果して思慮ある人達は『萬事が明瞭になる』まで吾々から離れて行かぬばならぬだらうか。

二、國際語の必要

若し或人が例へば『郵便は必要なりや。』といふ質問をすれば、現代人は恐らく一笑に附して仕舞ふであらう。それと同じく、『國際語は必要なりや。』とそんな馬鹿げた質問をすれば。次の時代の人達の物笑ひとなるだらう。現代の大多數の智識階級は既に斯る問題は問題とはしない。が併し未だ之に對して『否』と答へる人が數多く有るので、吾々は止むを得ず殊更この問題を提出するのである。『否』と云ふ人達の一番主なる動機は國際語は國語や國民性を破壊しやしないかといふ所にあるらしい。併し國際語は唯、異民族——それは相互にまるで啞者のやうだ——の間に相互了解の可能を與へやうとするだけである。それは決して國民の内の生活の中にまで侵入しやうとするものではない。國際語が國語を破壊するだらうといふ杞憂は、恰も例へば遠く相離れた人間

同志の意思の交通を可能ならしめる所の郵便は人間の口頭での會話を不能ならしめる懼れがあるとなすのと同じく笑止の至りである。「國際語」と「世界語」とは二つの全然別種のものである。決してそれを混同してはならない。若しも吾々が何時か一つの全人類の民族に融合して仕舞ふ事が有り得たとしても、國際語は此不幸、似而非愛國者は斯く言ふ）には何の責任はない。それは人類の變轉した信念や、考へ方の爲である。斯くて確かに國際語は人類にとつて願はしきことの達成を容易にするであらう。併し乍ら若しも共存の願望が獨立せる民族の内に生れないならば、國際語それ自身も確かに其様な民族の結合を強ひないであらう。似而非愛國主義の望ましき事であるか否かは、別問題として、吾々は唯國際語に對する憧憬は最も狂熱な盲目的なる似而非愛國主義と雖へども、決して避け得ないと云ふ事丈を述べるに止めて置く。何となれば國際語に向つての憧憬とさうして似而非愛國主義との關係は愛國主義と家族に對する愛との關係と同じいからである。「同國人民の間の相互の交通と了解との擴張が家族的愛に對して何等かの脅威をなすとは誰れが言ひ得やうか。國際語はそれ自身を以て國語を無力ならしむる事が出来ないのみならず、却つてそれと反對に國語の優勢と完全なる成長とを導く事は疑ひもない事である。色々の外國語を學ばなければならぬと云ふ必要の爲に、完全に自分の言語を有つて居る人はほとんど見あたらなくなつた。そして言語自身も絶へず相互に衝突して、益々混亂し不完全となり、其の自然的な豊かさ、温雅さを失なつて行く。併し乍ら、各人が唯一つの外國語——そして又最もたやすい——を學ばねばならない時には、其の言語を根本的に學ぶ事が出来るであらう。而して各々の言語は多くの相隣れる言語の壓迫から免れて、完全に其の民族のあらゆる力を保存しながら、最も力強く華かに發展して行くであらう。

國際語の反對者が提出する第二の理由は、如何にして國際語が國語の中から選出せらるゝか、又一國語が國際語として採用されたとしても、人類は相互に接近せずして、或る一民族がその他民族に超越して享受する餘力の爲に他の凡ての民族を壓迫し、併呑する慮がありはしないか、と云ふ事である。此理由は全然根據が無いと云ふ譯ではない。併しながら、それは唯國語の二三の考への足りない、不適當な形式に對してのみ、提出され得るのである。若しも國際語が以下示す如く中立の言語であり得、而して又あるだらうと云ふ事に注意を向けるならば、此理由は全然意味がなくなつて仕舞ふ事は勿論である。

次に若しも吾々が、國際語の採用の可能性、不可能性に就いての問題を暫く置き、この點に關しては後述するであらう）さうして國際語の採用が唯吾々の必要に因つて居るものである事を假

定し、更に言語の選擇に於て或る叫ばれて居る誤謬を避けるならば、誰しも國際語の無用に就いては、最下級の言語さへ發し得ないと云ふ事を承認するに違ひない。國際語が世界に齎らす處の利益は凡てに對して非常に大であり、明らかであつて、此事に就いては特に言ふ必要もない位である。併しながら、吾々の解明の完全の爲丈にも此事に就いては尙數言を述べて置かう。

諸君は曾て特に人類を、人間と同じ形に造られて居る所の他の凡ての動物から超越して斯くも高く引揚げた所のものは何であるかに就いて考へてみた事があるか。實に吾々のあらゆる高き文化と文明とは、唯一つのもの、御蔭であるのである。即ち言語の所有と云ふこと。それは吾々に思想の交換を可能ならしむる。若しも吾々がお互に言語で意思の交通をする事が出来なかつたり又吾々の各自が凡ての世の中の智識や學識を先づ初めから自分自身で學び知らねばならなかつたとしたら——思想の交換の御蔭で、既に完成された技術の結果や、多年鍛へられた各方面の智識や、又吾々に類似のあらゆる被造物やの利用をする代りに——何うであらうか。吾々は其時にはそこらにうろついてゐる智慧もなく防備もない動物より、最も低い一段すら、より高くは立つては居ないだらう。吾々から手も足も、諸君の欲する何でもを取去つてもよい。併し唯思想の交換の可能丈は残して置け。さうすれば吾々は自然界の王者として絶へず、無限に完成の道に進み行

くであらう。併しながら、吾々の各自に一千の手を與へても、又色々の今迄知られなかつた感情や才能を與へても、たゞ思想の交換の可能を取去るならば、吾々は單なる愚かな助けなき動物となり終るであらう。若し非常に不完全な、そして非常に制限せられた、思想交換の可能性でも人類にとつて、斯くも偉大なる意義を持つて居るとするならば、如何に偉大なる、そして、誰にも計り知るべからざる利益を、完全なる思想交通を可能ならしむる言語が、人類に與へるかを考へてもみよ。其言語の爲に、單に甲が乙と了解し合ふ事が出来、丙が丁と、戊が己と了解する事が出来るのみならず、彼等の凡てが他の凡てと了解する事が出来るであらう。人類の生活に對してどんな大なる多くの發明も、國際語の採用がなすであらうやうな、其様な偉大なる有益な改革はなし得ないであらう。二三の小さな例を擧げてみよう。各國民の著書を他の各國民の言語に譯さうとしたとする。之は確かに不生産的な莫大の勞力と金錢とを要する。しかもそれにも係はらず吾々は唯人間の文献の最も取るに足らない小部分を譯し得るに過ぎない。さうして吾々各自にとつては、豊富な色々の思想の含まれた人間の文學の多くが少しも得られずに終つて仕舞ふ。けれども國際語があれば其時には、人間の思想の範圍内に現はれる所の凡ての事が、唯此の一つの中立語に翻譯せられ、多くの著書が正しく此の言語にて書かれ、さうして人間精神のあらゆる産物

が吾々の凡てに獲得せられるであらう。」人間の智識の二三の分派の完成の爲に吾々は常に至る所で國際會議を開催する。併しながら、それに参加し得るものは、役にたつ何事かを聴かうとしたり、又何か重要な事を發表しやうとする者ではなくて、唯色々の言語で話すことを知つて居る人だけであるとは何と惨めな事だらう。吾々の生命は短かい。そして學問は遠大である。吾々は學び、學び、しかして更に學ばなければならぬ。學習に對しては、吾々は短かい生涯のほんの一部——吾々の少年時代と青年時代と——を捧げる事が出来るだけである。併しながら、噫々残念なるかな、是等の懐かしき時代の大部分は言語の修得の爲めに全々不生産的に過ぎ去つて仕舞ふ。若しも國際語の御蔭で、言語の不生産的な修得に捧げられた所の凡ての時間を、効果のある實際的な學問の修得に捧げる事が出来たならば、如何に多くの得る所があるだらうか。又其時は人類は如何に高く向上するであらうか。」

併し乍ら、此點に關しては之以上語るのを止めやう。何となれば、讀者の各々が國際語の二三の形式に對し如何によく關心しても、彼等の間には、國際語の利用そのものを疑ふかも知れない人が一人でもあるとは信じられないからである。併し乍ら、彼の同感する事や反對する事に就いて精密な考慮を加へる習慣のない多くの人々は、通常、若し彼等が或る思想の二三の形式に

反對すればその思想を全的に攻撃しなくては濟まないやうに思つてゐるやうであるから、そこで吾々は此解明の順序として茲に尊敬する讀者諸君の凡てに對して希望しておく。即ち諸君は少くとも國際語の必要に就いては全然疑つてゐないのだといふことを先づ記憶の内に良く止めて置いて貰ひたい。それから吾々の到達した第一の結論をもよく心に止めて記憶して貰ひたい。又その結論を諸君が承認してをられる事もよく銘記せられんことを望む。第一の結論は即ち次の如くである。

「それを以つて凡ての國民や民族が相互に了解し合ふ事の出来る國際語の存在は人類に大いなる利益を齎らすであらう。」

三、國際語の可能

19
今や吾々は第二の問題に移るであらう。國際語は可能なりや。之れに就いても、亦何等未來の事の分らない人間と云ふものには一寸も疑問を挟む事は出来ない。何となれば、其可能性に反對し得る最も小さき事實も無い計りでなく、又其可能性に就いて一寸でも疑はずには居られない様な、最小原因も無いからである。次の事實を學問的な自信を以て斷言する人がある。言葉は自然

的な組織的なものであるけれども、それは各民族の言葉の組織、氣候、遺傳、人種の混合、及歴史的條件などの夫々別異なる哲學的性質に依るものである。そして其等教養有る人の言は民衆に對して非常な感動を及ぼす。殊に若しも其の言が充分に色々な引用や、民衆に取つて珍らしい専門的な術語で組立てられて有る時には尙更である。けれども自己獨特な判断や見解をなす教養ある人は、之は唯内容の無い似而非學問的駁辯であつて、何の意味もなく、又初めてそれを知つた子供でも、最も容易に反駁する事が出来る、と云ふことを良く知つて居る。毎日の熟練から吾々は次の事を良く知つて居る。若しも吾々が如何なる國からでも一人の小供を、其生れた日から全然異なれる、又は正反對の國民の間で育てるならば、彼は其國で生れた子供と同じ言語で良く純粹に話せるのである。併し中年の人にとつては、通常外國語を學ぶ事は困難である。其原因は確かに言語の機關の構造から來て居るのでは無く、唯單に彼が忍耐を有たず、時間を有たず、教師も手段も何も無いと云ふ事に原因するのである。其同じい中年の人も、若しも彼れが少年時代に母國語で教育せられずに、課業によつてそれを學修しなければならぬとしたならば、自分の母國語でありながら、その語の修得に同じい困難に出合すであらう。終りに教養ある人々は又、今や實に數ヶ國の外國語を學ばねばならないやうな事情にある。さうして彼等は確かに自分の言語

の組織と一致して居る様に見へる言語を選ばずに、唯彼等の必要とする言語を選ばねばならないのである。従つて斯う言へやう。凡ての人が色々な言語を學ぶ事の代はりに、皆が只一つの同じい言語を學び、さうしてそれに依つて相互に了解する事が出来る、と云ふ事は、決して不可能ではない。たとへ完全なものでなくとも共通に採用せられた言語を有つて居りさへすれば、其時だけでも國際語の問題は既に決定され、人々は相互に聾啞の様に向ひ合はなくて濟むこととなる。吾々は是非次の事を記憶せねばならない。若しも至る處で全世界との交通の爲めに只一つの言語を學ぶべきであると云ふ事が、一般に認められるならば、到る處に、多くの此言語の良き教師や特殊の學校が出来るであらう。又凡ての人は此言語を最大の喜びと熱心とを以て續けるであらう。そして遂には、凡ての親達は其子供を少年時代に此言語を祖國語と並行に馴らすやうにするであらう。従つて人々が國際語としての役割をさせる爲に、どの一つの言語を選ばうとするか、そして此選擇に付いて、彼等に相互同意が出来るであらうか、と云ふ事に就いての問題はさて於いても吾々は斯う云ふ事實を確言することが出来る。即ち國際語の存在は、全く可能であると云ふ事を上述せる所から明白に知つたと。そこでこれ等二つの今迄に到達した疑ひもない結論を良く記憶に止めて置かれよ。即ち、

- 一、國際語は人類に大なる利益を齎すであらう。
- 二、國際語の存在は完全に可能である。

四、國際語は何時採用されるか

國際語は將來採用せらるゝであらうか。若しも國際語が人類に對して大なる利益を齎し、さうして其存在が可能であると云ふ結論に到達したとすれば、此二つの結論から、既にそれ自身で次の結論が出て来る。國際語は早かれ遅かれ、必ず採用せらるゝであらう。何となれば、然らずんば吾々は人類には最も初歩的な智識さへも存しないものと云はなければならなくなるから。若しも國際的な役割を完成する事の出来る言語が今日迄無いならば、そしてこれから創造して行かなければならないとしたならば、この章の劈頭に提出した問題に對する解答は疑がはしくなるであらう。何となれば其様な言語を作る事が出来るかと云ふ事は未だに分らないからである。併し確かに吾々は斯う云ふ事を知つてゐる。言語の數は非常に多い。而してそれらは何れも必要の場合には國際語として定められる事も出来る。唯それ等の間に或ものが此目的の爲には一層適して居り他のものが一層適して居ないと云ふ相違がある計りである。吾々は從つて、全ての準備が整つ

て居るのである。唯要求と選擇とをすれば良いのである。上に示した問題に對する解答は斯くて最早疑がふ餘地はない。人々は意識的な生活をして居る。そして果てしもない幸福を目當として進んで居る。であるから、若しも此の事、又は彼の事が、人類にとつて大なる、そして確かな利益を與へ、又それを可能ならしむると云ふ事が解れば吾々は常に完全に次の事を豫言出来る。其瞬間から、即ち此の事に人類が注意を向け始めた其時から彼等は最早頑強に益々それに向つて突き進むであらう。そして其目的を達する迄、何時迄も止めないであらう。若しも二つの人類の團體がお互に一々の小川に依りて相分かれて居るとしたならば、しかも彼等がお互に交通する事が非常に有利である事を知り、又兩者の岸を結び付けるべき板が彼等すぐの近くに準備せられて居るのを知つたとしたならば、其時は最早、確信を持つて、次のやうな事を、豫言する必要もなからう。即ち早かれ遅かれ其板は川に渡され、而して交通が行はれるであらうと云ふ事を。可成の時間がぐゞ／＼してゐる内に過去つて仕舞ふのが常である。しかもその邊巡は通例最も無意義な口實によつて起るものである。伶俐な人は云ふ。『かゝる交通の設備は兒戯に類するものである。何となれば誰もこれまで川に板を渡したものはないし、又かゝる事は全く習慣にない事であるから』と。巧者な人は云ふ。『先人は川に板を渡さなかつた。であるから其塵事は空想である』と。

蒙養ある人は交通は自然に適した事であるが、人間の構造は板の上を動く事が不可能である事を證明する。けれども早かれ遅かれ、板が渡され交通が始まる。あらゆる有用な思想も、あらゆる有益な發明も之と同じい。少なくとも先の分らない人間と云ふものは、一定の事柄が有用であり効果のあるものである事がわかれば、保守主義者の側からのあらゆる反對にも係らず、それは早晩必ず採用せられるであらうと、直ちに非常の確信を以つて云ふ、何となれば人類の先天的の智識がそれを保證する計りでなく、その實際的な幸福や、利益に對する努力が此の事を證明するからである。國際語の場合に於いても亦その通りである。數世紀の長い間、人々は國際語の必要を未だ大いに感じて居なかつたので、此問題に就いて深く考へ込む事はなかつた。併し乍ら今や人類間に繁盛して來た交通が彼等の注意を向けしめ、且つ又、人類は國際語が最も大なる利益を齎らし、しかもそれが可能であると云ふ事を會得し始めたので、彼等は最早や、何等の疑ひもなく、益々それに向つて突進せんとして居る。其必要は彼等にとつては毎日實感が深くなつて行くばかりで、最早此問題が解決せられる迄は安堵して居られなくなつてゐる。諸君は此の事を疑がふ事が出来るか。斷じて否。此事が何時實現されるであらうか。吾々は今それを豫言しやうとは思はない。それは一年後に、十年後に、百年後に、或は數百年後であるかもしれないから。併し

乍ら唯この一事だけは確かである。即ち、此思想の最初の先驅者達が何んなに苦しまなければならぬとしても、さうして若しも此思想が幾度もく、數十年間全く眠りに陥ちたとしてもそれは、決して死滅して仕舞ふものではないと云ふ事は。常に益々熾烈に國際語の採用の必要を叫ぶ聲が響き渡るであらう。そして終には早晩此問題が社會其ものに依つて解決せられないとしても各國の政府は讓歩して國際會議を開催し、國際としての或る一つの言語を選ばなければならぬなるだらう。其處には唯時の問題がある計りである。諸君の内の或者は言ふであらう。それはすぐに實現するであらうと。又他の者は言ふであらう。それは遠い／＼未來に起る事であらうと。併し乍ら、要するに何時か此事實が出現し、そして人類が國際語の大いなる利益と同時に其可能性を知つて何時迄此も問題に對して無關心ではなく、又相互に無了解な孤獨な生物の集合として止まる様な事も無いであらう事は何人と雖ども、寸毫も疑がふ事の出来ない所である。斯くて吾々は諸君に向つて吾々の到達したる第三の結論を記憶に止められん事を望むのである。即ち、『早晩國際語は必ず採用せられるであらう。』

此處で吾々は少しく止まつて吾々國際語の思想の爲に働いて居る者に就いて數語を費やさう。吾々の試みて來た所の事に因つて、諸君は吾々が決して世の中に多くある空想家でも夢想家でも

ないと云ふ事を視られるであらう。諸君の多くは恐らく吾々の内に觀たり、又多くの雜誌が、其爲に吾々が戦かつて居る處のそのもの、本質の中には入つて行かうとも仕ないで、たゞ吾々のことを描いたりするやうな其様な空想家では決してないのである事が解るであらう。諸君が見らるゝ通り吾々は人類に大いなる利益を齎らし、早かれ晩かれ必ず實現するであらう所の事柄の爲に奮闘して居るのである。従がつて思慮分別ある人ならば愚かな考への足りない民衆の嘲笑などは恐れもせずに、勇敢に吾々に参加する事が出来る。吾々は、良く熟考した確實な事の爲に戦かつて居るのであるから、如何なる嘲笑も、攻撃も、吾々を追ひ退ける事は出来ない。未來は吾々のものである。國際語の形式は、——その爲に吾々は戦かつて居る所の——未來に於いて誤謬として示されるであらう。又將來の國際語は吾々の選んだ様なものではないであらう。と云ふ事を一寸でも想像してみやう。併しその事は吾々を決して困惑させる筈はない。何となれば吾々は實は其形式の爲に働らいて居るのではなくして、其思想の爲に働らいて居るのであるからである。而して吾々の奮闘に對して具體的な形式を與へたのは、單なる抽象的な理論的な奮闘と云ふものは通例何の効果も無いものであるからである。而も其言語の具體的形式すらも、良く熟考されたものであり、確實な將來を持つて居るものである事を以下に證明しやう。併し乍ら若しも諸君がこ

の形式に疑問を有つとすれば、其様な形式などは吾々に大した關係はないのである。若しも此形式が間違がつて居るならば吾々は明日それを喜んで變へるまでのことである。そして必要の場合には明後日もう一度變へるであらう。しかし吾々は吾々の思想の爲には、いつかそれが完全に實現されるまで、何時までも戦を持續するであらう。若しも吾々が冷淡なる利己主義の聲に従つて、唯國際語の形式はおそらく時と共に吾々の國際語よりは全く別なものとなつて行くであらうと云ふ理由の下に奮闘を止めてしまふならば、それは例へば後におそらくもつとより良き通信の手段が発見せらるゝだらうと云ふ理由の下に、蒸汽使用を止めるのと同じであらう。又は後からいつか國家の構造としては更に善き形式が発見せられるだらうと云ふ理由の下に國家の改善を止めて仕舞ふのと同じい。現在に於いては吾々は未だ微力である。世人は吾々を嘲笑し、後指を指す事が出来やう。けれども『最後に笑ふものが最も良く笑ふ』のである。吾々の仕事の進歩は遅い、しかも困難である。吾々の多くの者は活動の効果を現はす時迄生き長らへられないであらう。又死する時まで吾々は嘲笑的であらう。併し乍ら吾々は確信を有つて墓の中へはいつて行かう。——吾々の仕事は決して死なない。それは永遠に亡ぶる事はあり得ない。それは早かれ遅かれ必ず目的を達する。と云ふ確信を有つて——。又若しも困難がられない仕事に疲れ

て失望と無頓着とを以つて手を放なして仕舞つたとしても、同様に矢張この仕事は決して死な、
 いだらう。疲れた働き手の代りに更に新しい働き手が出現して来るだらう。何となれば更に繰
 返して言ふが、若しも國際語が人類に對して大いなる利益を齎らし、そうして又それが可能であ
 ると云ふ事が疑ひもない事であるならば、それがいつか必ず實現せられる、まで永久に人類の記
 憶する所であらうといふ事は、舊慣といふものによつて盲目的にされて居ない人なら決して疑ひ
 得ない所である。後至者は吾々の記憶を祝福するだらう。そうして吾々を空想家と呼んで居るお
 懶巧な人々を、彼等が遇する所は、丁度現今吾々が亞米利加發見當時の、又は機關車發明當時の
 お懶巧な人々に對してゐると同じであらう。

五、如何なる國際語を採用するか

今や吾々は前の説明に返へらなければならぬ。吾々は國際語は早晚必ず採用せらるゝと云ふ
 事を證明した。併しながら何時如何なる方法に依つてそれが實現するかと云ふ問題がまだ残つて
 居る。數百年、又は數千年後に實現するのも知れない。此の爲には各國の政府の相互の承認が
 必要であるか。此の問題に多少満足な解答を與へるには、吾々は先づ、別な問題を説明する必要

がある。即ち「如何なる言語が國際的となるかを豫知する事が出来るか。」前に述べた問題とこの
 問題との間には次の様な僅かな連絡がある。若しも如何なる言語も國際的となる事が出来ない
 したならば、又色々の言語が此事については多少同じ運命を持つて居るとしたならば、其時に
 は各國の政府——少なくとも最も主な國々の——が此爲に會議を開き、そして國際語に就いての
 問題を決定するまで待たなければならぬ。新しい事件を政府が決定するには、如何に大なる
 困難が伴ふかを知つて居る人は國際語の問題を、充分に完成したる又夫に加入の價値あるもの
 にする迄には多くの年月を必要とする事がわかるであらう。而して全部の決定を見る迄にはおそ
 らく其後も各種の委員會や外交官達の何年もの努力をも必要とするであらう。相離れたる人々や
 社會は何もなす事が出来ない。彼等は絶へず政府を刺戟する事が出来る計りである。そして政府
 の容喙なしには、此問題は解くわけには行かない。その時には此問題決定までは長い距離がある
 であらう。併し乍ら豫め如何なる言語が何時かは國際的になるであらうと云ふ事を精細に確實に
 知る事が出来るとすれば、事は全然別となる。其時には最早恐らく無限の年月を待つて居る必要
 は失なはれるだらう。凡ての社會、凡ての相距たりたる人々は其獨特の指導に依つて此言語の普
 及に勤める事が出来やう。此言語の仲間絶へず創造をして行くであらう。其文獻は速かに豊か

になつて行くであらう。各人の相互の了解の爲に此言語を用ふべく、國際會議がたゞちに開かれるであらう。そしてやがては言語が、全世界に非常に擴まつて政府をして唯此完成された事實に對して裁可を與へるに止めしむるであらう。

吾々は如何なる言語が國際的となるかを豫知する事が出来るか。幸にも吾々は此問題に對して全く確然と答へる事が出来る。

『然り吾々は、如何なる言語が國際語となるかを豫言することが出来る、それは完全なる精細さと確實さとを以つてしかも何らの疑がひもなく豫言する事が出来るのである。』

此事に關して、讀者諸君に確信を與へる爲に、各國の代表者の會議が既に、効果を表はしたことを述べやう。そして如何なる言語を彼等は選ぶ事が出来るかを通觀してみやう。彼等の選び得る處の言語は唯一つしか無い。又他の言語を選ばうとしても、それは確かに不可能である。そして又若しも彼等が健全なる識者の意志に逆らひ、其説論にも係はらず、他の言語を選べは其時には生命が失なはれて、其選擇は唯死んだ文字ばかりとなり終るであらう。斯くの如くして吾々は各國の代表者が集まり來つて國際語の選定に向つて歩みよりつゝあるのを思つて見やう。

彼等にとつては次の事が豫定せられて居るのである。

- 一、現存せる生きた言語の中のいづれを擇ぶべきか。
- 二、死語(例へば、ラテン語、ギリシヤ語、ヘブライ語など)から擇び出すべきか。
- 三、現存する人造語の中から選出すべきか。
- 四、未だ存在せざる全く新しい言語を造る委員會を設定すべきか。

讀者諸君に選擇者の仕事や思考と一處に考へて行く事の出来る爲に吾々は先づ上述の言語の範疇の特徴を知らせる必要がある。生きた言語と死んだ言語との特性は讀者諸君には多少知られて居る。それ故に人造語に就いてのみ數言を言はう。それは恐らく讀者の大部分に取つては、*“Ignita”* (未知の境)であるだらう。

如何にして人類に人造語と云ふ觀念が生れて來たか。又此觀念は如何様に展開して行つたか。最も不完全な萬國通用書法から最も完全な多くの言語の形式迄多くの階段を通つて來た。如何に多くの試みが此の事になされたか。最近二世紀間に如何に多くの努力が捧げられたか。是等の事に就いて吾々は語らうとは思はない。何となれば諸君は是等の事を聴取すべく充分な時間も持たなければ、忍耐もないだらうから。吾々は唯人造語の特性に就いてのみ述べる事とする。それに

は吾々は勿論眼前に不成功に終つた以前の色々な試みはさて措くこととする。現在の人造語の性質は吾々の説明すべき多くのことを有つて居ない。併しながら、現代に於いて存在して居る國際語の中の最も完全なる形式を備へて居るのである。

國際關係に於いて完全なる中立性が無かつたなら人造語は次の様な性質によつて消滅して仕舞ふ。

一、その學習は驚くべく且つ信すべからざる程の容易さである。それは誇張なしに斯く言ふ事が出来る。自然語よりは少なくとも五十倍位容易である。人造語を知らないものは、其容易さが如何なる程度に迄到れるかを知る事が出来ない。偉大なる著者であり、哲學者であるレオ・トルストイは彼が國際語を擴めやうとして、エスペラント語に就いて次の様な事を言つて居る事は、全世界の誰も疑がは無い所である。『その學習の容易な事は此様なものである。エスペラントの文法と字書と、そしてエスペラントで書かれた論文とを受取つてから勉強の二時間も経ない内に書く事は出来ないけれども讀む事は自由に出来た。あらゆる場合に、歐羅巴の人々が拂ふ犠牲。』
 言語の學修に捧げる時間と勞費——は非常に無意義であつて、少なくとも歐羅巴人や亞米利加人は此言語で結び付けられたならば、其効果は非常に大にして、とても此試みをやめる事は

出来ない』之は何を意味するかを考へてみよ。『勉強の二時間も経ざる内に！』さうして之と同時に、先見の明のない正直な人達はエスペラント語に就いて、盲目的に考へる代りに正確に良く了知する爲小さな努力をする様になつた。教育のない人よりも教育のある人がエスペラントをより速かに修得出来ると云ふ事は事實である。しかし乍ら教育のない人も亦それを非常に驚くべき容易さをもつて學ぶ事が出来る。何となればエスペラントの學修には何等の豫備知識がいらないからである。エスペラントの内には、彼等はこれ迄、其固有の祖國語で書く事すら非常に拙なく間違ひ計りしてゐた數多の無教育者を見出すであらう。併し乍ら、エスペラントでは彼等は全く誤りなしに書く。しかも彼等は自然語を學ぶに少なくとも四年や五年はかゝるだらうが、此言語は數週間の内に學び得たのである。

千八百九十五年に唯スエーデン語とエスペラント語ときり知らない學生が、オデッサに行つた事がある。その時に一人の新聞記者が彼等と會談しやうと思つて生れて、初めてエスペラントの本を或る朝手にした。さうして其日の夕方には彼はもう充分にスエーデン人と話をする事が出来た。

國際語の斯く信すべからざる容易さはどこに原因するか。あらゆる自然語は非常に多種多様な

そして全く一時的な事情の集合の途中で、盲目的に組立てられたものである。そこには何等の論理も働かなかつた。何等の一定せる計畫もなかつた。唯單に使用があるのみであつた。一の言語は其様に用ふるべく採用したものであるから、其様に使はなければならない。又他の言語はそれと異つた使用をする爲に採用したものであるから、又それと異なつた使用をしなければならぬ。それ故に豫め吾々は斯く言ふ事が出来る。思想の表現の爲の發音——人智が意識的に又嚴重な論理的法則に従つて組立てる——の組織は偶然に又は無意識的に組立てられた發音の組織よりも數倍容易であるに違ひないだらう。こゝで吾々は此様な考への全部の進行、——人造語創作者が辿り行つた所の——を説明する事が出来ない。自然語と比較して人造語が有つて居る所の大いなる容易さを精細に表はす事も出来ない。何となれば、之は長大なる論文を必要とするだらうから吾々はそれ故唯二三の例を擧げるに止める。例へば殆んどあらゆる言語に於いて名詞は一定の性を有つて居る。例へば獨逸語では「頭」と云ふ字は男性である。佛蘭西語では女性である。そしてラテン語では中性である。斯うした事には何等かの意味や目的が少しでもあるだらうか。しかも學修者にとつて名詞の性を記憶する事が如何に困難であるか。學修者が充分完成して、そして最早混亂の爲めに *La fin* の代りに *Le fin* と云ふたり、*Der Strick* の代りに *Das Strick* と云つ

たりしなくなる迄には如何に多くの練習を持續せなければならぬだらうか。人造語に於ては、**名詞の性は全くない**。何となれば、それは言語の中ではんの僅かの目的しか有つて居ないからである。茲に諸君は既に最も些細なる方法で如何に言語の容易さが達せられるかの最う一つの例を見たわけである。自然語の内には最も複雑な名詞形容詞の變化や動詞の活用の色々の形がある。そしてその變化や活用の形が甚だまぎらはしいものであるばかりでなく、その一つ一つが更に一列の變化をする。例へば動詞の活用の内にはあらゆる時と法とに依つて色々の形を有つて居る。しかもその時と法との中に又、人稱や數に依つて更に各種の形がある。人は文法の大きな表列を學び記憶せなければならぬ。しかもそれは唯初歩に過ぎない。さらに之に加ふるに數多の不規則な變化や活用がある。そしてそれを單に學んだり、記憶したりなどする計りでなく、どの變化が規則的であり、どの變化が不規則であるか、又どの單語は如何なる變化をするかと云ふ事を常に覺へてをらなければならぬ。此爲には忍耐と不斷の練習とが必要である。忍耐強く勉強してもまる一年もかゝる。このやうな複雑の代りとして人造語にはたゞ**六ツの小さな單語**——*gr, os, us, u,*——があるばかりである。それを諸君は數分間あれば充分に記憶出来る。そして一日覚えればもう決して忘れないし、間違へる事もない。諸君は驚いて尋ねるだらう。何うして其

様な事が可能であるか。それは何でもない事である。エスペラントは吾々に教へる。名詞形容詞の變化は決して必要でない。何となれば前置詞で完全に代用させられるから。又動詞の活用に於いても、凡ての動詞に對して一つの表で充分である計りでなく、その表も分詞の外其内に現在、過去、未來及び不定法、假定法、命令法の唯六つの形を含んで居ればそれで充分なのである。諸君は確かに只今の瞬間に考へるであらう。此小さな活用表では、其語尾變化は意志表現に不足はしないかと。併し全くさうではない。人造語を學んで御覽なさい。さうすれば其活用が思想のあらゆる意味合を、自然語の最も複雑な面倒な表に比ぶれば、比較にならない程良く正確に表はす事が解るであらう。何となれば、人造語は言語に是非必要なものは捨てないで、唯絶対に必要以上のもを、及び全く無益な不必要物を捨て、仕舞ふに過ぎないからである。一體何の爲めにあらゆる人稱や、數に對して別々の語尾を必要とし、又各々の時、各々の法に於ても夫々新しい語尾を必要とするのか。この様な語尾は全然餘計なものである。動詞の前に来る代名詞は充分にその人稱と數とを表はすから。

多くの言語に於ける正字法は、(そうして之については、國際語として選ばれる運命を最も多く有つて居る言語の内に一番多いことである。)學修者にとつては誠に十字架である。一つの語の内

で、一定の文字は發音され、他の語に於いては、それが發音されなかつたり、又は別な發音がされる。一つの語に於いて一定の發音が或る文字で書かれ、他の語に於いては別な文字で書かれる其爲めに佛人や英人はその祖國語で正しく書く事が出来る爲には數年間を要する。此正字法を急に變へる事を絕對に不可能事である。何となれば、その時には互に相異なる無數の言葉が、或は全然、或は殆んど目立たない程の發音上の僅かな相違で書取の綴字が相互に全く區別出来なくなるだらうから。人造語は各々の文字に對して明瞭な嚴重な規定をせられた常に同じい發音を與へて居る。であるから其の爲めに人造語には正字法の問題は全然あり得ない。そして人造語を學んで十五分も経れば——即ち甚だ單簡なアルファベットを覚えれば——誰れでも其言語で全く誤りなしに書き取る事が出来るであらう。然るに自然語に於ては何年もの困難な退屈な勉強の後やつとそれが出来るのである。

上に述べた二三の例に依つて、意識的な人工の取入れが、如何に大なる容易さを言語に與へるか云ふ事に就いての觀念が受入れられたであらう。吾々は勿論もつと多くの他の例を引く事が出来る。何となれば自然語に於ては到る處大なる困難と混亂とに出合ふが、それは人造語に於ては全然餘計物として捨てられて居るか、或は一、二の短い言葉、短い法則に還元せられて居り、

しかも語尾の變化や言葉の豐富さや正確さに對して何等少しの缺點さへなしにさうされてゐるからである。併し乍ら此事に就いては之れ以上述べるのを止めやう。そして唯これ丈の事を言つておかう。エスペラントの全文法は唯十六ヶ條の短い規則から成立つて居る。それは誰れでも半時間あれば十分修得し得る。實にエスペラントを學ぶ事、たつた半時間にして學修者は全文法とそして言葉の凡ての組立とを記憶出来るのである。唯彼に残つて居るものは單語の簡單な、そして容易な修得だけである。此の事の重大さを了解し評價する爲めには諸君が自然語を學び出したと想像して見ればよい。即ち忍耐強い數年間の勉強の後に言語の構造を完全に會得し、そして最はや此言語の内に何等文法上の、又は正字法上の誤りをなさなくなり、そして遂に今や唯言葉を出来る丈多く學びさへすれば良いと云ふ域に迄達したと想像してみよ。其時に諸君は確に嬉しく思ふであらう。そして斯く言ふであらう。努力の最も困難なそして最も面倒な部分は通り過ぎて仕舞つたと。ところが本當に！ エスペラント語では、やつと半時間の勉強でこれだけに達するのだ。

従つて、若しエスペラントが上に述べた様な性質——文法や正字法上の大いなる容易さと、規則正しさ——を有つてをるとすれば、エスペラントは如何なる自然語よりも數倍の容易さである

と云はねばならない。併しエスペラントの容易さは之丈けでは終らない。まだ言語の眞に單純な發音と云ふことが残つて居る。諸君は此處にも亦非常な容易さに出合ふであらう。例へば言語の規則正しさそれ自身が既に學ぶべき言語の數に非常な節約を與へる。何となれば、一つの言語の名詞の形を知るならばもう何の苦もなく形容詞や副詞や動詞などを知る事が出来る。然るに如何なる自然語に於ても多くの表現が各品詞に對して一つ／＼別の言葉を有つて居る。(例へば *Parler, oral verbalement*) 又あらゆる言葉を前置詞や他の言葉と結合する完全な無制限な權利があるので多くの言葉を覚える事から救はれる。然るに之に反し自然語に於ては夫々獨特の別々の語幹を有つて居るので言葉の或るものと或るものとを結合させるといふ事は如何にしても許されない。此のエスペラント語の有つて居る當然な便利な造語法の外に未だ別な人工的方法とでも言ふべき言葉の修得に非常な節約を與へる所の方法がある。それは例へば接頭字や接尾字である。其の中のほんの僅かのを例として引用しやう。接頭字 *mal* は全然正反對の意味を與へる——例へば *bona* 善也——*malbona* 惡しき——従つて *mola* 柔也、*varma* 暖也、*supre* 上、*ami* 愛する、*estimi* 尊敬する——と云ふ語を知つて居ればもうすぐ其れに既に覺えた *mal* を結合はせて *malami* 硬也、*malvarma* 寒也、*mal-supre* 下に、*malami* 憎む、*mal-estimi* 貶す、などの言葉をつくる事

が出来る。

次に in と云ふ接尾字は女性を意味する。例へば、(patro 父——patrino 母)であるから、fratris 兄弟、onkio 伯叔父、Dovo 牡牛、Koko 牡鶏、等の言葉を知れば、最早 fratino 姉妹、onkino 伯叔母、bovino 牝牛、kokino 牝鶏、等の言葉を覚えることは要らなくなる。又 in と云ふ接尾字は道具を意味する。例へば (kombi 梳る、—— kombilo 櫛) 従がつて tondi 剪む、pati 射る、sonori 鐘が鳴る。plugi 鋤く、等の言葉を知れば、自から tondilo 鋏、patilo 銃、sonorio 鐘、plugilo 鋤、等の言葉を知るのである。その様に言葉の数を少くする小語片はまだく澤山ある。そこで人造語の構造に就いて上述した所を思ひ起してみよ。さうすれば次の様な事を吾々が言つても、諸君は容易に承認するであらう。人造語は自然語よりも五十倍は容易である。しかもこには何等の誇張もない。此人造語の大なる容易さを記憶に止められん事を望む。何となれば吾々は後に復其問題に歸るであらうから。

〔人造語の第二の顯著なる性質は、その完全なる事である。即ち數學的な正確さと屈折性と、限りなき豊富さとを兼有して居る、人造語がかゝる性質を有すべきことは、最初の人造語の出現以前に既に優秀な頭腦を有つた人々によつて豫想され豫言された處である。其人達は色々な現代の

ジユピター達よりも一層眞面目に、此人類に取て最も重大な思想に關係して居た。そしてかう考へてゐた。人造語の本質に就いてほんの表面的な智識しかないことは、彼等の名譽や價値を低下せしむるであらうと。吾々はその例として、ベーコン、ライプニッツ、バスカル、デ・ブロッツセ、コンデヤーク、デカルト、ボルテール、デイデロー、アンペール、マックス・ミュラー、などの様な偉大なる光を引用する事が出来る。併し乍ら吾々は上述のものを虚偽の教養をせられたソフィストの武器と見る。それ故に、上の人達のことと威張らずに吾々は純然なる論理を以つて、凡てを證明しやう。人造語は自然語より一層完全であり得る計りでなく、又有らねばならない。此事は次の事を考へてみれば誰しも了解出来やう。どんな自然語でも皆、人が他のものから聞いたことを繰返して行く途中に出来上つたものである。何等の論理も、人間の智識の何等の意識的な決定も、そこには及んで居ない。諸君は幾度も聞いた表現は何でも使用することが出来る。諸君が一度も聞いた事のない表現は使用する事が出来ない。かくて吾々はあらゆる自然語の中に到る處次の様な現象に出合ふ。諸君の脳髓の中には何等かの概念が表はれて来る。併しそれを口の言葉で表はす事が出来ない。それ故に諸君の頭の中に一つの概念として又一つの精神的な言葉として存在して居る所のその概念を多く言葉や非常に不便な説明書の力をからなければならぬ。例

へば『シャツ類の洗濯は通常女の人かやる』といふ事によつて諸君は『洗濯女』といふ概念を表現する言葉を有つて居る。併し若し男がシャツ類の洗濯をしやうとしたら多くの言葉の内でも最上據り所がなく、其様な男を何と名付くべきか、解らない。何となればシャツ類の洗濯に従事する男を何といふか決してこれ迄聞いた事がないから。治療には之れまではひとり男のみが従事した。併し乍ら女醫が現はれ、又は學位を有つて居る婦人が現はれた時には多くの言葉の中にそれ等に對する語が見當らなかつた。其様な名を表はす語の表現の爲に、之まで若干の言語の説明的な用法の助けを借りる必要があつた。しかも諸君が、それらの名前から形容詞や動詞などを作らうとするならば、それは全然不可能である。どの言語にも多くの名詞がある。それらは一つで、あの性もこの性も有つといふことはない。又格に於いてもさうである。由つて來た所の形に於いても同様である。又比較級や、色々な變化を有つて居ない形容詞、色々な時や、人稱、法などを有つて居ない動詞がある。其様な名詞から形容詞を作らば事は出来ない。其様な動詞から名詞を作る事も出来ない。何となれば、繰返して言ふが自然語は論理に依つて作られたのではなく、唯盲目的に、『人がさう話す』又は『さう話さない』と云ふだけで作られたものである。従つて、諸君の頭の中に生れ出る所の、あらゆる概念を——併しそれに對しては諸君は今迄一つの言語の表現

も聞かなかつた——諸君は通常表現する事が出来ない。そして説明で補なはなければならぬ。併し乍ら、嚴格な、例外や獨斷を許さない。思考法の上に作られた所の人造語の内には何等それに類似する所はない。『或一定の言葉は一定の形式を有たない、或は一定の觀念的結合を許さない』といふ様な種類の表現は人造語に於いては全然不可能である。例へば明日一人の男が子供を生み、又は其乳房で彼を養育する能力を與へられたと想像せよ。さうすれば彼に對してすぐに單語が出来上る。何となれば人造語に於いては一つの性に對する一つの單語が存在して、もう一つの性に對する單語が存在しないと云ふ事は有り得ないからである。又明日或る人が或る新しい最も珍らしい職業を選んだとせよ。例へば、空中勞動と云ふやうな。さうすればすぐに彼にとつて一つの單語が出来る。何となれば人造語では職業を表はす接尾字を添へさへすれば諸君の頭に表はれ得る如何なる職業をも言ひ表はす事が出来るからである。

43
 其外、どうしても忘れてならないのは、人造語の完成は限りなく可能なことである。何となれば、人造語には如何なる言語にも存在するあらゆる良き規則、良き形式、良き表現を其内に取入れる完全な権利があり、又其内に見出し得るあらゆる缺點を改善變更する権利もあるからである。然るに自然語に於いては、其様なことは決して有り得ない。何となれば若しさうなれば自然語は

最早人造語となつて仕舞ふからである。上述の人造語の二大長所——格段なる容易と完全——の説明の外に未だ多くの長所があるが、それに就いてはこゝでは述べない。今度は直ちに人造語の缺點に就いて話を進めて行かう。人造語を少しでも知つた人は——そして自分の見る所を大膽に信ずる事の出来る人は——そして又瞑目しながら外國語の文章を反復する様な事をしない人は次の様な一つの結論に來る事が出来る。即ち自然語と比較すれば人造語には缺點は殆んどないと。實に諸君は人造語に對する非常に多くの攻撃を聞く機會を有つた。併し乍ら是等あらゆる攻撃に對して、吾々は唯一つの答を言ひ返す事が出来るだけである。それは人造語に就いて何等の智識も有たなければ、未だ嘗つてそれを見た事もない人達の口から出て居るのである。——見た事もなく、研究した事もない計りでなく、論理的に其本質に就いて考へてみた事さへもなく、そして彼等の言ふ所を考へるところか、却つて盲目的に、聲高い、時世に媚びた意味のない言語をあたりに投げ散すに過ぎないのである。若し彼等が少しでも人造語に就いて知つて居りさへすれば彼等の言語に就いて全然知らないとしても單にそれを理論的に考へるだけでも、彼等の言ふ所に少しの根據もない事に氣が附くであらう。若しも或人が隣町に於て凡ての家が紙で作られ、そこに居る凡ての人々は手もなく又足もないのだと云ふ事を信じさせやうとしても、群衆——學者の

嚴かな調子で話し出される言葉なら何でも眞面目に信ずる——に向つてなら感動させる事が出来るやうが、併し乍ら以前から思慮深き人ならばかうした言葉には極めて批判的な態度を以つて對するであらう。何となれば、既に彼の賢明を以てして、是等の言葉に何等承認すべき根據を見出さないからである。而して彼に何等かの疑の存する時には、彼は唯、隣町に行き、さうして觀察するであらう。其時彼は、自分の聞いた言葉が全然愚にもつかざる事である事を悟るのである。

人造語に於いても亦斯くの如くである。盲目的に言葉を繰返す代りに諸君は其言語の本質に就いて先づ考へてみる必要がある。然る時に諸君は彼等が少しの根據もない事を了解するであらう。而して若しも理論的な考察が諸君に對して未だ不充分であるならば、其時には唯行つて見よ。さうして人造語の教科書に目を投ぜよ。其言語の構造を知れ。そしてその既に甚だ豊富な各種の文獻のいくらかを深く究はめよ。又實驗をなせ。更に到る處諸君の鼻先にある所の事實を觀察せよ。さうすれば其時には人造語に對する反對論が、いかに無意義であるかを了解するであらう。

例へば諸君も聞いたであらうが、こんな反對論がある『言語は内閣で作る譯にはゆかない。それは恰かも、生物は化學者のレトルトの中で造ることが出来ないのと一般である。』この文句は如何にも美はしく且つ『賢明に』聞こえる。そして大多數の人々にとつては、もはや人造語は鬼戯

であるといふことは何等の疑問ともならない。併し若し是等の人にして小さな、實際ほんとは小さな質問——『何故か』といふ——をするだけに獨創的な批評眼があつたならば、然る時にはこの喧しい文句はたちまちにして彼等の眼には無意味に見えて来るだらう。何となれば何等の論理的な答もなく、そしてこの文句は唯、美はしい言葉の集まりに過ぎなくて最少の論理的基礎すらもない事に氣附くであらうから。人造のアルファベットに對しても亦上と同様の文句を言へば言へるであらう。しかもそれは既に多年の間人類が使用して大なる利益を得てゐるものなのである。又蒸汽や自轉車の助けに依つての人造の乗物や、吾々の凡ての人造的文明やに對しても、全然上と同様の文句を向けることが出来やう。そして何か新奇な有用な思想が現はれると、いつも人は頑固にこのやうな文句を繰返すのである。お、文句、文句、文句よ。何時汝は人間の精神の支配を止めるのだらう！

世人は言つた。人造語は不可能である。人は人造語では相互に意志が通じないだらう。各民族は人造語を別なことに用ふるであらう。人造語では何事も表はすことは出来ないであらうなどと。けれどもこれは正直や善意のどんな少ない所にも萬人が容易に實際に照査し得る事實であり、そして凡ての言語學者が單にそれを照査することを欲しない——彼等は權威ある調子で云ふ

が、しかしたゞ公衆の喝采を受けんが爲め眼を閉ぢて物を見なかつたり又人造語は新らしく未だ一般の流行になつてゐないといふ理由だけでそれに泥を投げたりする——のであることに注意を向けるならば、これらの文句は全く突止の至りであり寧ろ大いに憤慨すべきものであることが分かる。盲目的に無茶に文句を投げかけること止めて、行つてよく觀るがよい。其の時これらの言葉は全く無禮な虚偽であることを見るだらう。そして人造語は既に事實として存在してをり、各國民が長い間實用して大なる利益を收めてをり、口にも筆にも良く、精確に相互の了解をしてをり、又各國民に全く平等に使用されてをり、そして既に豊富に各種の文獻が現はれてをり、各國民の思想や感情などが最も巧にそれをやつて表現されてをり、ことを見るであらう。愚にも附かない雑多な理屈を向先見ずに併べ立てるよりも、先づ行つてよく、觀よ事實を——既に以前から嚴存し、何人に依つても容易に認め得られる、疑ひも無き且つうなづかざるを得ないたしかなその事實を。——さうすればもはや人造語採用に反對する何等の根據も絶對にあり得ないといふことに對して疑ひを挾まなくなるであらう。

さて此章の劈頭に述べた事に戻らう。即ち國際語を選定する爲めに主なる各國から代表者を會議に召集したと假定して見やう。先づ如何なる言語を彼等は選び得るかを見なければならぬ。

けれども彼等の選定する所を、大なる確信と完全なる保證と精確とを以つて豫め想像し得ることは必ずしも困難事ではない。

即ち自然語と比較して人造語が非常に優れてゐるといふことに就いてこれまで述べて來た所に依つて、その當然な結論として、たゞ人造語のみが選定され得ると思はれるのである。併し乍ら、その會議が不幸にして全く頑迷な保守主義者や新らしいことには何でも反對するといふやうな人ばかりで成立し、そして彼等の頭に、あらゆる點に於いて非常に不便な自然語を選定した方がその百倍も便利な人造語よりも遙かにましだといふ考へが浮んだと假定して見やう。其時には一體どうなるだらうか。若し彼等が現存國語の中から何れかを選出しやうと欲すれば、各國民相互の嫉妬ばかりでなく、かくの如きものゝ在る爲めの各國の自然的な氣遣などが、極めて大きな障礙として現はれるであらう。何となれば、國際語として選ばれた言語の國民は、直ちに外の國民に超越して大なる餘勢力を得るであらうし、又は容易にそれを壓服し併呑するに至るであらうことは理の當然であるからである。併しこの會議に集つた代表者達は決して此様なことにはこれまで氣がつかなかつた。そこで相互の嫉妬や併呑を避ける爲めに或死語、例へばラテン語の如きを選んだと假定しやう。果して其時はどうなるであらうか。會議に於いて決定された所は單に

生命のない文字であり又決して實際的效果のないものとして残ることは極めて明白である。自然語は、現存のものも、最早や死んで亡んでしまつたものも——死語は尙更六ヶ敷しい——非常に六ヶ敷しい。それで少くとも多少根本的に修得することは、時間の十分な餘裕のある人や金錢の豊かな備へのある人でなければ及ばない所である。従つて本當の言葉通りの國際語はなくなつてしまつてたゞ社會の上流階級の國際語といふことになつてしまふかも知れない。事情が斯くの如くであり、そして其以外の何ものでもないといふことは、營に論理が表はしてをるのみならず、實際の生活そのものが違ふの以前から明白に示してをる所である。確にラテン語は既に昔から各國政府によつて國際語として選定せられてをり、各國の高等學校では政府からの規則に依つて學生達が幾年ものラテン語の學修をさせられてゐる。しかも果してラテン語を自由に我物としてをる人がどれだけあるだらうか。であるからその會議の決定は何等新機軸を出すといふわけもなくたゞ的もなく、單にこれまでになされたそして效果あらめ様として、しかも何らの効果のなかつた所の以前の決定を無益に繰返すに過ぎないものである。現代に於いてはいかに權威ある會議と雖もラテン語に對して中世紀に於いて有するやうな勢力を與へることは不可能である。中世紀に於いてはラテン語の中立性の爲めのみならず、その絶對的な威嚴の爲めに、各政府や全

社會や萬能の教會や生活そのものまでが一心となつてこれを支持してゐた。又ラテン語は學問智識の基礎とせられ、その爲めに生涯の殆んど大部分が獻けられ、祖國語は押し除けられた。そして識者も祖國語では自分を表はすことが出来ないといふ單なる理由の下に、強制的に習得しそれを使つて勞作をしなければならなかつた。併し乍らそれにも係らず、ラテン語はひとりで没落して行つたのみならず、其最も盛んな時代に於いてすらたゞ社會の選ばれた階級の附屬物となつてしまつた。そしてそれ以外の何でもあり得なかつた。然るに人造語が選定された場合には、その數ヶ月後には、直ちに全世界のそして人類社會の各範圍に渡つての所有物となることが出来るであらう。單に智識階級や金持ばかりでなく、又貧乏人や無識な田夫野人に至るまでの所有となるであらう。

かくて諸君は了解したであらう。將來のかゝる會議は人造語以外のいかなる他の言語をも選ぶことは全然出来ないといふことを。實にあらゆる點に於いて自然語よりも明確に大いに優れてゐる所の人造語を選定する可能性があるのに、自然語を選ばうとするのは、恰も鐵道で運ぶことが出来るのに馬でバリーからテベルブルグへ物を運ばうとするのと同じく愚の骨頂である。どんな會議でも此様な選定をなすわけには行かない。けれども會議員が考へが足りなくて舊慣で盲目にさ

せられてしまつて、其様な不合理な選定をしたとすれば、其様な周圍の事情に支配されてやつた選定は相不變生命のない文字として残り、そして生命といふ點に關しては國際語の問題は未解決のままに残ることゝなるであらう。そして早晩新しい會議が更に召集されて、こんどは人造語を選定するといふことになつて初めて問題は確定するであらう。

かくして亦吾々の到達したこの結論をよく記憶に止められんことを望む。即ち次の時代の國際語はたゞひとり、そして必ず人造語のみであるであらう。

六、如何なる人造語が共同使用に採用されるか

今や未だ解決すべく一の問題が残つて居る。即ち如何なる人造語が共通語にまで採用せらるゝかといふことが其れである。先づ一寸見ると此の問題を解決するといふことは何等の可能性がない様に思はれる。如何となれば——諸君は必ず斯う云ふに相違ない——人造語は實にあまりに多くある。そして其の数は更に未だ千倍にもなし得るであらう。如何となれば各人は銘々に自分の好む所に従つて人造語をつくり得るからである。其れで其れ等の中の何れが選ばれるか、人は果して豫見し得るだらうかと。

此の問題は實際最初一寸見た丈では人々に對し到底不可能なことの様に見える。しかし如何なる言語が選ばれるだらうといふことを豫見し、豫言することは極めて容易である。之れは次の様な理由から來て居る。上に述べた様に一般に於て現存し且つ試みられつゝある言語の數に關する極めて通俗な意見は未だいくらでも人造語が現はれるだらうといふことになつて居るのであるが其れは全く誤りであり、且つ完全なる人造語の歴史及び其の本質に對する無知の上に立てられた意見である。

凡ての前に於て吾々は斯ういふ事實を確證して居る。即ち既に二百年間に人造語の爲めに働いた人若しくは現に働いて居る人の數は非常に多數であるに拘らず今日迄に實際に言語としての體裁を具へたものは唯つた二つしかなかつたのである。即ちヴォラビュツクと 에스ペラントが夫れである。注意を此處へ向けて貰ひたい。たつた二個の人造語のみだ。諸君は毎日雜誌の中に於て其處此處に種々の人造語が未だ現はれたといふことを讀まれる。世人は諸君にそれ等の名を挙げるときには此の語の構造に關する注意書をも與へる。又世人は諸君の所に此の新しく出來たと云はるゝ言語で書いた若干の語句を齎らす事すらもある。そこで一般公衆に對しては新しい言語が雨後の筍の如く造り出されつゝある様に見えるのである。併し此の意見たるや全く誤りである。

そしてそれは雜誌が彼等が書いてあることについて必要な探究をなさずして、單に其れ等が珍しい出來事を以て讀者を饗應し、又は一寸氣のきいたことを爲す能力を有つて居るといふ丈けで満足して居るからである。そこで諸君は毎日雜誌により新しい國際語といふ誇大な題目の下に諸君に齎られつゝあるものは單に其の計畫であつて、速成的に且つ十分なる考慮なしに焼き出された計畫にすぎない。そして其の實現といふことは何時の事やらわからない。先づ非常にノノに遠い將來に屬して居るといふことを知つておく必要がある。是等の計畫が其處此處に短いパンフレットの形で現はれたり、或は非常に聲高い且つ多くの約束せる語句を以て充たされた浩瀚な書籍の形でさへ現はれて居る。そして地平線の上に現はれたり、消えたりして居る。そして諸君は是等の計畫の著者達が其れ等の實現にまで足を入れるや否や、それは全く彼等の力に副はず、理論に於ては事は極めて容易く見えたが實際に於ては非常に困難でそして到底完成し得られないといふことを理解した時にそれに就いてはもはや何ものも聴くことが出來ないのである。何故に是等の計畫の實現はそんなに六ヶしく、且つ其の爲めに今日迄單に二個丈しか實際に準備され且つ生長能力ある言語が現はれなかつたか。それに就いては吾々は次の如くいふことが出来る。そして吾々は單に諸君の注意を斯ういふことに向けられんことを乞ひたい。即ち現在迄に實際存在

して居る人造語は唯二つだけであつて従つて若しも大會が今日出來て既に存在して居る人造語の中から其れを選ばんとせばそれは單に二つの中から一つを選ぶといふことになるのである。だから従つて大會の問題となるべきものは最初見た様に全く容易なものである。此の二つの語の何れを選ぶべきかといふことは大會は又一分間も躊躇するを要しない。如何となれば言語の生活それ自身が既に夙うから此の問題を最も明確な仕方で解決して居たからである。即ちヴォラビュックは到る處既に 에스ペラントによりて排除せられたからである。エスペラントがヴォラビュックに對して優秀なる點は驚くべく大なるものである。即ち夫は各人に向つて一目瞭然たるものであるそれは非常に熱心なヴォラビュキストですら自白する所である。若し吾々が諸君に次のことをいふならばそれでもう十分である。即ち『ヴォラビュックは新しい思想に對する民衆の熱情が未だ全く新なる時代に現はれた。之に反しエスペラントは創作者の財政上の困難な爲めに公に現はれたのは其れより數年遅かつた。そして既に到る處に豫め準備されたる敵意と出會した。ヴォラビュキストは内部の煽動の爲めに大けさな手段をとり、そして最も大きな純アメリカ式の廣告を以て實行した。之に反しエスペラントは全時代を殆ど全く或る物質的手段を用ふることなしに活動した。そして自體の行動の中に大なる不熟練と無援助を表はした。然るにエスペラントの

出現の最初の瞬間に於て兎に角吾々は大多數のヴォラビュキストがエスペラントに公然宗旨換へ爲し、そして未だ一層多數の者はヴォラビュックは到底エスペラントに比肩すること出来ないと思心では十分承知し乍ら、しかも自らを全く打勝たれたと自白するを欲せず、要するに國際語の思想からは全く落伍して了つたのを見るのである。然るに一方エスペラントの出現以來既に十三年間に、全世界の何處でも一人の——然り吾々は繰返していふ一人でさへも——エスペラントイストからヴォラビュキストに宗旨換をしたといふものを聞かない。エスペラントは彼れが戦はねばならなかつた多くの障礙を有つたに拘らず、引續き生長し、花咲きそして常に一層力強くなつて居る。之に反しヴォラビュックはすでに長いこと殆どすべての人々から見放されて、そして既にとつくの昔に死んだとさへ稱せられて居る。

如何なる點に於てエスペラントがヴォラビュックよりすぐれて居るかといふことは吾々は勿論茲に全く詳細に述べ立てることは出来ない。一例として吾々は若干の點を指摘しよう。

一、ヴォラビュックは其の發音が非常に野生のまゝで、且つ粗雑である。之に反しエスペラントは調和と審美性が完全でそして自ら伊太利語に髣髴たるものがある。

二、無教育者に對してもエスペラントはヴォラビュックより容易である。しかし教育ある人に

對してはそれは一層非常に容易である。其の單語たるや——極めて少數の例外を除き——專斷で考出されたものでなく、羅馬ゲルマン語等から採用したものであり、而して其の形も各容易にそれと知れる様になつて居る。それ故に各の多少教育ある人士にすでに數時間學習した後には自由にエスペラントで書いた本を全く辭書なしに讀むことが出来るのである。

三、ヴォラビユツクの使用は必ずそれを不斷に繰返して居なければならぬ。如何となればさうしないとすぐ忘れてしまふ。つまりそれは單語を勝手に造つたからである。エスペラントの使用は一度之を修得して了へば、もはや、それを忘れることはない。たとひ彼れがそれを長い間用ひなかつたにした所で再びやる時にはすぐ前のことが思浮んで来る。

四、エスペラントは既に最初に於て口頭の對話をなすにも非常に容易である。ヴォラビユツクに於ては人は非常に長いこと辛抱して多くの互に似よつた發音の單語（例へば *bab, pap, pap, pep, heb, bab, pop, pup, bup, pub, bib, pip*, 等）の明瞭な差別に狙れるまで其の耳を練習した後でなければ對話など出来ない。

五、ヴォラビユツクに於ては其の構造の原則に若干の根本的誤りがある爲めに（例へば單語の初めと終りには母音を用ひない。何となればそれは文法上の符號に過ぎないからとする如き）

各の新に要求される單語は必ず创作者の作つたものでなければならぬ。各の固有名詞ですらも例へばアメリカは *Melop* で、英國は *Nelij* であるが加きものである。それは單に大多數者の學習に對し無暗と器械的記憶に訴へる語を與ふるのみならず、又すべての言語の發展を常に其の创作者若しくは其の命を奉ずる學士院の自由に屬せしむるものである。之に反しエスペラントに於ては辭書の上に文法の完全なる無影響の爲めに、又すべての既にそれ自身に於て國際的になつて居る『外來語』は何等變更を加へることなしに他の言語に於けるが如く同様之を取入れることが出来るといふ規則がある爲めに、多數の單語が學習に對し全く要求することなしにつくられるのみならず、又其の語は永久にだん／＼と创作者とか、學士院とかの干渉を受けることなしに發展して行くべき能力がある。

以上吾々はエスペラントがヴォラビユツクに優越せる點を指摘したが、併し乍ら吾々は全く決して之を以てヴォラビユツクの發明の價値を無視しやうとする意向は毫もない。シユラエル氏（譯者註、ヴォラビユツクの著者）は偉人である。そして其の名は永久に『國際語の思想の歴史』の上に最も名譽ある地位に立つてあらう。吾々は單に若し今日國際語選擇の爲めの大會が實現して現在せる二つの人造語の中から之を選ばんとせば一分間の躊躇ですら要せずと云ふことを指摘したに

過ぎないのである。

吾々は従つて次のことを證明した。即ち若し今日國際語選擇の爲めの大會が出来たならば、其の時には大多數の現存せる語があるに拘らず、吾々は既に今完全なる確實さと精密さを以て如何なる言語を大會は選ぶだらうといふことを豫見することが出来るのである。即ち凡べての既に存する生きた言語、或は死んだ又は造られた言語の中から大會は單に一の言語、—— 에스ペラント語を選び得るといふことを證明したにすぎない。どんなに其の大會の組織があらうと、又どんなに其の時の政治的條件があらうと、又如何様な考慮、偏見、同情、反感の下で其の大會が動いて居やうとにかゝらず其れは絶対に或る他の 에스ペラント以外の言語を選ぶといふことは出来ないのである。如何となれば國際語の役目に對しては 에스ペラント丈けが全世界に於ける唯一の候補者——然り全く競争者なしの候補者——であるからである。それ故に大會の最も都合の悪い組織に於てさへも其の中には必ず考の深い人もあつて 에스ペラントが他の語より優越せる點があまりに強く其の眼に入つて居るであらうから其の人々から此の語に就いて殆ど知らない他の人々に知らしてやるだらうし、さうすればもはや大會が他の言語を選ぶだらうといふことを想像することは出来ない。しかし若し、凡ての豫期に反し大會が他の語を選ぶ程盲目であつたとしても吾々

が既に證明せる如く言語の生活其れ自身がそれに就いて心配するだらう。そして大會の決議は全く死文として更に新しい大會が出来て正しき選擇をなす迄残る外はないであらう。

七、一層よき人造語の出現は可能か

今や吾々に未だ一つの最後の問題が残されて居る。即ち今の一時的に於ては 에스ペラントが眞に唯一の國際語の候補者としてあらはれて居るが、しかし國際語選定の爲めに設けた各國の代表者の大會が恐らく未だ急には有效になりそうもないので、多分十年か乃至百年かの後になれば必ずや 에스ペラントより一層進歩した多くの新しい人工的な言語が現はれ、そして其の結果其れ等の一つが此の大會で選擇せらるゝことになるでなからうか。若しくは多分大會自身が一層適任なる委員會を組織して、新しい人工的な言語の創案を作ることになりはしないだらうか？ といふことが夫れである。

此の事については次の如く答へることが出来る。第一新しい言語の出現の可能といふこと自身が既に大なる疑問である。又委員會に對して新しい言語の創案を委任するといふことは恰も其れに善い詩の創作を委任すると同様に全く無意義なことである。だから完全なる、凡ての關係に於

て適當なる、生活能力を有つた言語の創案といふことは多くの人にはそんなに簡易な遊戯的な仕事の様に見えるが實際に於ては非常に困難な問題である。其れは一方に於て特に勝れた才能と精神を要し、他方に於ては偉大なる精力と、忍耐と、企てられた事業に對する熱烈なる、無限に添加する愛を要求する。しかしさうして出来た吾々の語は多數の人々を非常に驚かすであらう何となれば彼等に取つては唯或る人が自分勝手に決定するもの丈けを要求する様に見えるからである。例へばテーブルが「バム」で、椅子が「ビム」であるとする様なもので、言語は既に用意されて居るからである。

完全性のある適當なる、生活能力ある言語を有つて居るといふことは丁度例へばピアノを演じ、深林の中を突破する様なものである。音楽の本質の何たるを知らぬ者にとつてはピアノを演ずるより一層容易なものは何もない——即ち人は一の鍵盤を弾きさへすれば一の音を聴くことが出来、他の鍵を弾けば又他の音を聴くであらう——諸君が全時間種々の鍵を弾けば又凡ての曲を聴くであらう。何の六ヶしいことがあらう？ と斯ういふのである。しかし彼が愈々自分の即席に作つた曲を演じはじめた時に凡ての者は嘲罵を浴せかけて退席し、彼れ自身ですら、彼れの受取つた騒音を聴いて、やがて音楽といふものは單に鍵盤を弾くことばかりから成立つて居ない。

だから事が流暢に行かないといふことを少しく理解し始めるであらう。——そこで左様な自惚れ姿でピアノの前に坐つて自分は凡ての者より一層善く演ずることが出来ると傲つて居たさすがの豪傑も羞づかしくなつて逃げ出し、もはや二度と公衆の前に出しやばらなくなるのである。

又嘗つて大なる森林の中に居たことのない者にとつては森の中を此方の端から向の端へ通り抜けるのは何でもない様に考へられる。『何の造作が要らう？ 子供ですらやる事が出来る。人はたゞ其の中へ入つて眞直に前へ行きさへすればそれで十分だ——さうすれば數時間の後乃至數日の後には諸君は森の彼方に於て自身を見出すであらう』と、斯う考へるであらう。併し彼は少しく森の深所に入るや否や、忽ち道を失ひ、彼は全く森から遁れ出ることが出来なにか、或は長いこと彷徨ふた後にやつと出ること丈は出来たが、併し彼は自分が最初出ようと思ふた目的の場所へ出ることは決して出来ないものである。その様に亦人工的な言語もある。言語の創案を企て、其れに對して前以て名前を與へ、其れについて讀書社會に喇叭を吹き立てること——凡てそんなことは何でもないことである——しかしさうまく此の仕事を終へるといふことは全くそんなに容易なものではない。自惚れの姿で多くの者は其の仕事を企てる。しかし彼等が少しく其の中に深入りするや否や、彼等は或る定つたプランのない、又は何等の價値のない音聲の不秩序な集合物を

得るに過ぎないか、或は種々の障礙やお互に矛盾せる要求の爲めに弱らされて、忍耐を失ひ結局其の仕事を抛棄して、もはや再び彼等を公衆の前に現はさなくなるであらう。

適當なるそして生活能力のある言語の創案といふことは多くの者の考へる如くそんなに容易いものではない。人は他の物の間に於て最もよく次の事實から理解することが出来る。人は斯んなことを知つて居る。ゾオラビユツクや、エスペラントの出現する迄に極めて多數の人工的國際語の創案が試みられた。そしてそれ等試みの極めて少數のものだけが上述の二語の現はれた後迄生き残つて居る。是等の試みの名前や、其の作者達の名前を列べ立てることは諸君は國際語の思想の歴史に於て見出すであらう。是等の試みは全社會によつての如く一私人によりてもなされた。彼等は多大の勞力を費し、其の中の若干は又非常に大なる資金を費した。しかし此の多數の中から唯二つ、單に二つだけが完成に達し、仲間を得、實際の使用を得るに至つた！ しかし又是等の二つは偶然に時を同じうして出たが、作者お互には全く他を知らず全然獨立に出來た。エスペラント語の作者は自分の全生涯を其の思想の爲めに献けた。彼れが非常に幼い時からやり始めて此の思想と共に生長し、そして夫れに献ける爲めに一切を準備してあつたといふても差支ない位であつた。彼れは自白して居る、「彼れの精力は唯、自分が嘗つてなかつた所のものを創作したと

いふ事を意識することによりてのみ支持された。そして自分が勞働した間に於て具さに既めた辛酸は頗る大きく、且つ大なる忍耐を要するものであつて、若しも彼のゾオラビユツクが數年早く即ちエスペラントの完成されなかつた以前に現はれたとすれば彼れは確に其の忍耐力を失ひそして自分の言語の上により大なる勞働をなすことを拒んだであらう、假令彼れは自分の言語がゾオラビユツクより非常に勝れて居るといふことを十分に知つては居たとしても」と斯うエスペラントの著者は云ふて居るのである。

以上述べたすべてのことから諸君は今や次のことを了解するであらう。即ち既に以前から二個の全く完全な人造語が存在して居ることを全世界の人々が知つて居る今日に於て同様な永久浮ぶ瀬のない勞働を初めから計畫し、そして之を好結果に終らせる爲めに十分なる精力を以つて其の事業を繼續するや否や大なる疑問である。殊に現存して居るものより一層善いものを他日生み出すだらうといふ希望が彼を鼓舞しなければ猶更のことさうである。

そして實際に於て如何程少量の希望を其の様な企業者が有つて居るかといふことは人がエスペラントの後に現はれた多くの試み又は計畫によつて十分に承知してあるべきである。其の著者達は自分等の前に既に全く整備せる模範を有し之によりて彼等は働き得たに拘らず、其の出來上つ

たものを見ると是等の試みの何物も計畫の範圍以外に出でざるのみならず、又是等の計畫自體からして既に人が若し其の著作者が忍耐と能力を以て是後まで之を導いたとしても結局エスペラントより何等勝れた所のない、却つて一層まづいものであるかも知れないといふことを明にしたのである。然るにエスペラントは非常によく其れ等の要求を満足した。即ち國際語として非常に容易な、精密な、豊富な、自然な、生活能力ある、屈折能力ある、發音優美な、其の他種々の特色を有するものに造作られた。是等の計畫の各々は其の語の一の或方面を改良すべく努めて居る。此の爲めに反對に凡ての他の側を捧げ乍ら、さうして例へば最近の計畫者の多数は次の様な措策を用ひて居る。即ち公衆は凡ての計畫を其れに對し、教育ある言語學者達が關係して居るかどうかといふことによつて評價するといふことを知つて居るから、彼等は彼等の計畫が確に實際に於て適當であるといふことについては心配しないで却つて最初の瞬間に於て言語學者達に好感を與へしむる様にといふことに浮身をやつして居る。その爲めに彼等は自分等の語彙を既に存在して居る自然語の最も主なるものを殆ど全く變更する事なしに採用して居る。そこで言語學者達は計畫された言語でかゝれた語句を受け取つて第一回目にして其の語句が多くエスペラントよりは一層容易なことを理解したことを知らしてやる——さうすると計畫者達はもう勝利を得たわけで、

彼等の言語は（もしそれが完成されるれば）エスペラントよりは確によくならだらうと吹聴する。

しかし各の賢明な人はすぐ此れは單に幻想であるといふことを了解するであらう。説明の爲めに又は他を誘引するために採用した末梢の原則に對して茲には最も重要な原則、（例へば無學者に對する言語の容易さ、屈折性、豊富さ、精密さ其の他）が提供されて居る。だから若し同語が他日完成されたとしても夫れは最後に於て結局絶對に何物をも與へ得ないであらうといふことを。如何となれば若し國際語の最も重大な評價が出来るだけ最も容易に教育ある言語學者達に理解せらるゝ様に組織するを要することゝなれば吾々は之に對して簡單に或言語を提供する事が出来る。

例へばラテン語の如き全く何等の變更をも要せないで教育ある言語學者達は之を又最も容易に第一回目で了解し得るであらう。自然語彙を出来る丈變更しないと云ふ原則はエスペラント語の著者によく知られたのみならず又正しく彼れの先例によりて新しい計畫者達が實に此の原則を採用した所である。しかしエスペラントは賢明に此の原則を能力の標準に従つて充たした。夫れが國際語の他の一層重要な原則と矛盾しない爲めに最も注意して採用した。然るに今時の計畫者達は唯此の原則のみに其の全注意を向けて、そして他の凡ての一層重大なものを理解し得ず彼等は犠牲として拋棄してしまつた。何となれば夫れ自身の間に種々の原則を結合し、一致せざるとい

ふことは彼等のなし能はざることであり、又なさうとさへ欲しなかつたことだからである。否彼等は自ら準備された又は適當な或者を與へようとしてさへ希望せず、唯彼等は影響を及ぼさうとのみ欲したのである。

上述する所により諸君はエスペラントを排除する様な新しい言語の發生する恐れは毫頭さへもないといふことを了解されたことと思ふ。其の言語の中に於てはあれ程の才能、あれ程の犠牲及びあれ程の長年月の忍耐と又大なる熱心を以てさへけたる努力が含まれて居る。其の言語は多くの年の繼續がすでに凡ての關係に於て試みつくされ、そして實用に於てそんなによく吾々が國際語に要求する凡てのものを充實することが出来たのである。しかし敬愛なる讀者諸君は之を以て未だ十分とせず、更に吾々が諸君に對してエスペラント語が何等競争者を有たないことについて完全な何等疑問のない論理的の確さを與へる様にと要求して居る。そして幸に吾々は諸君に對してかゝる完全な確實さを與へ得ることを喜ぶのである。

若し全ての人造語の本質が其の文法に組織されるものならばヴォラビュツクの出現の瞬間から國際語の問題は永久に解決され、そしてヴォラビュツクに對する競争者は出現すること到底不能であつたでせう。如何となれば凡ての缺點あるに拘らずヴォラビュツクの文法たるやもはや

人がより以上のものを與へ得ない位其れ程容易で又其れ程簡單なものであるからである。新しい言語は單に若干の枝葉の點に於てヴォラビュツクと異り得るかも知れない。そして各人は其の枝葉の問題の爲めに新しい言語をつくる計畫をなす馬鹿はないといふことを知つて居る。全世界は其の枝葉の問題の爲めに既に全く準備され、又試みられた言語を拒まないであらう。極端なる原因に於ては將來の學士院又は大會がヴォラビュツクの文法の中に其の小さな有用なる效力ある變更をなすかも知れない。そして何等疑問のない國際語はヴォラビュツクであるかも知れない。そしてすべての競争は永久に除去されるかも知れない。しかし言語は文法ばかりから成るものではない。語彙はかりから成るものではない。そして語彙の修了といふことは人造語に於ては文法の修了の百倍も時間が掛るものである。然るにヴォラビュツクは單に文法上の要求を解決したのみで、語彙については其れは單に勝手に考へついた語の凡ての蒐集の外全く注意を缺いて居た。そして各の新しい著作者は自分の固有の要求に従つて之を考へ出す權利を有たしたのである。そこで既にヴォラビュツクの出現の當初に於て最も熱心なヴォラビュキストですら自然に明日は更に新しい、全くヴォラビュツクと異なる言語が出現し二語の間に戦が始まるだらうといふ恐れを懐いた。エスペラントに於ては事情は全く異つて居る。人は知つて居る——そして一分間でさへも

そんなことを肯定する研究者はなかつた——エスペラントは單に文法の問題を解決したのみならず、又語彙の問題も解決してしまつた。従つてもはや問題の一つの小なる部分すらも残つては居ない、全問題は解決された。そこで然らば何がそんな原因の中で新しい言語の作者があらはれるとすれば爲さるべく残つて居るだらう？ その人に對しては既に何者も残つては居ない——發見されたアメリカはすでに發見のしようもない!! 吾々は吾々に有効に提出しよう。今既に存し、すべての關係に於てよく、凡ての方面に於て試みられ、既に多數の門人や、多くの文獻を有せるエスペラントがあるに拘らず、尙ほ新しい言語をつくる爲めに幾年かの長い歲月を捧けて最後まで自分の勞力を提供し、そして彼れによりて提出された言語がたしかにエスペラントより一層よいと評する人があるにせよ——吾々はまあお手並を拜見しやう。如何なる見識を此の語が有するか。もし單に十六ヶ條の小規則から成り僅に半時間で卒業の出来るといふエスペラント語の文法が人間の思想の凡ての色合を最も精密な方法で表はし得る完全な能力を與へるならば何を其の新作者は一層よいものとして與へ得るだらう？ 極端な場合に於て彼は十六ヶ條の代りに十五ヶ條を與へ得るかも知れない。三十分の代りに二十五分間で學べる様にし得るかも知れない。さうでなからうか？ しかし或る人が此の爲めに新しい言語をつくらうと思ふだらうか、世界がかゝる

くだらないことの爲めに既に存在し、各方面に試みられた言語を拒むだらうか。たしかに否。極端な場合に於て世界は斯ういふであらう。「若し諸君の文法に於てエスペラントより一層よい何か枝葉の事項があつたら吾々は此の事項をエスペラントに採入れてやらう。これで事はすんだのだ」と。此の言語の語彙は如何なるものであらうか。現代に於ては如何なる發見者も既に疑つて居る。國際語の語彙は任意專斷に考へられた語から成立つては不可であり、必ず羅馬ゲルマニヤ系の語から彼等の最も共通に用ふる形のまゝで組立てられなければならぬと。これは多數の新しい計畫者達の考へる如く單に數多ある言語學者達がすぐ此の語でかゝれたる原據を了解し得る爲めではなく（一體國際語と云つた様な場合に於ては言語學者は最後の役目を演ずるだけである、何となれば彼等にとつては實にかゝる言語は敢へて要求されて居ないからである。）却つて他の一層重大なる原因の爲めである。

例へば彼の外來語と稱せらるゝ語の大多數はすべての言語に於て均しく用ひられ、すべての人は學ばずして之を知り、そしてそれを用ひないといふことは直接の不合理であるかも知れない。彼等に對しては又語彙の中に凡ての他の語は同音に響かなければならぬ。如何となれば然らざれば其の言語は粗野であつて、各の歩みの上に種々の要素の矛盾、不明瞭、及び言語の不斷の規則

的豐富さが困難にならしめられるかも知れない。語彙が此の様な種類の語のみから成り立つて他のものから組立てられてはならぬといふことはまだ種々の他の理由もある。しかし是等の理由たるやあまりに専門的であつて、吾々は茲に詳細に話すことは出来ない。若し吾々が唯凡ての最も新しい發見者達が此の既に如何なる疑問も遺さない所の語彙に對する法則を受取ると云ひさへすればそれでもう十分である。そしてそれ故に 에스ペラント語は正當に此の法則を以て自身を導きそしてそれ故に此の法則には語彙の選擇の上に大なる專斷は存し得ないのである。そこで殘された問題は乃ち何を新しい言語の作者は若し夫れが作られ得るとせば與へ得るかといふ事である。一つ一つの語に對しては人は一層便宜な形式を與へ得るといふことは眞理である。しかしその様な語は非常に少い。之れを人は最もよく次の様なことから察することが出来る。 에스ペラント以後あらはれた多數の計畫の何れでも諸君は採用してよい。諸君は其れ等の何れに於ても殆ど六〇パーセントの全く 에스ペラントと同じ形を取つた語を有して居ることを發見するであらう。そして若し諸君が之に對して未だ残りの四〇パーセントの語が 에스ペラントの形から異つて居る譯も——其の大部分は單に是等の計畫者が國際語の爲めに最も重大なる種々の原則の上に注意を向けなかつたか、又は單に其言語を全く或る要求なしに變へたといふ理由のみからした。——といふ

ことを附加したならば諸君は容易く斯う云ふ結論に達するであらう。其の多數の語はそれに對して人が 에스ペラント語の代りに一層便宜な形を與へ得るものである。其の數は決して二三十%より少くはないといふことを。しかし若し 에스ペラント文法の中に人が殆ど何ものをも變へることが出来ないで、語彙の中の語の二三十%しか變へ得ないとせば次の様な問題が當然起つて來なければならぬ。『然らば何を其の新しい言語は自體に表はして居るか』といふことである。若しそれが會つて作られ、そしてそれが實際に凡ての關係に於て適當なる言語として指摘さるゝならば、此れは決して新しい言語ではない。單に 에스ペラント語をいくらか變へたものに過ぎない。従つて國際語の將來に關する凡ての問題は單に 에스ペラントを現形のまま何等變更なくして採用するか、若しくは其の中に何時か或る種の變更が加へらるべきかといふことである。しかし此の問題は 에스ペラントイストにとつては既に何等の意味も有して居ない。彼等は若しも一部の者が 에스ペラントを自分の好む所に従つて變更せんと欲するならば斷乎として反對するのみである。しかし若し他日權威ある大會もしくは學士院が其の言語の中に一二の變更を決議するならば 에스ペラントイストは此れを喜んで受取り之によりて何ものをも失はない譯である。彼等は其の時は最初から或は新しい六ヶしい言語を學ばうとは欲しないであらう。しかし彼等は單に加へられた言語

の變更せる部分を學ぶ爲めに一日二日の犠牲を欲するのである。それで事は終るのである。

エスペランティストは全く彼等の言語がそれ丈け完全な或物を提出して居るといふこと、即ち何ものも一層高いものは既に存し得ないといふことを要求しては居ない。反對に權威ある大會が其のことについて人が其の決議は世界に對して力があるといふことを知つた時にエスペランティスト自身に其の爲めに委員會を選定し、之をして言語を管理せしめ、若しも、其の中に、變更しなければならぬと認めるものがあれば之に對し凡ての有効な改善を加へしむることを提議するだらう。しかし、此の仕事は全く委員會に於て成功し得るだらうか、それは無限の年月を要しないだらうか、それは大會に於て幸な結果に達するだらうか、若しくは實際に於て定められた事實は全く適當な形にあらはれるだらうか。その様なことを豫見する能力なくして、若しも、それが問題の將來の事實の爲めに實際に行はれ、凡ての關係に於て決定せられ且つ試みられた現在の事實を拒むならばそれは極めて愚なことであり、又委員會の側からも許すべからざることとせられるかも知れぬ。従つて若し大會に於て、エスペラントは善くないといふ結論に到達したとしても、それは唯エスペラント語を其の現在の形に於て受取るべきか、又は此れと並行して此の語の完成又は或る新しい理想的言語の創案の爲めの委員會を設くべきかといふ問題を決定し得るに過ぎない。

い。そして時と共に、其の委員會の仕事が幸福に最後まで運ばれ、多くの試験を経た後、全く適當と認められる其時に至つて初めて國際語の最初の形が除き去られ、そして其の代りに新しい形が生れるといふことを豫知し得るのである。賢い人は果して其の大會がかくの如くあつて他あるを許さないといふ如く行動することを許すだらうか。従つて若しも吾々が最後の將來の一般の言語はエスペラントではなくして、或る他のまだ創り出されてない語であると想像すら出来るならば凡ての場合に於て道は其の言語の方へ必然にエスペラントを經由して導かれなければならぬ。

そこで吾々が最初よりこれまで話した所のすべてを總括して見ると吾々は次の結果に達したといふことの上に諸君の注意を向けて貰はなければならぬ。

- 一、國際語の採用は人類に對し大なる利益であること。
- 二、國際語の採用は全く可能であること。
- 三、國際語の採用は早晚必然に何等の疑問もなく實現される、何程舊慣墨守家が反對しようとも。

四、何故に國際的には嘗て人造語以外の或る他の語が選ばれないだらうか。

五、何故に國際山には嘗てエスペラント語以外の或る他の語が選ばれないだらうか。又夫れは永久に其の現在の形に於て許されるだらうか。もしくは其の中で或る變更が後に行はるゝだらうか。

といふ問題を解決したのである。

八、結 論

そこで吾々は愈々以上述べた所の結論を見出さなければならなくなつた。先づ第一にエスペラント語派は決して多くの「賢い人々」とか「實際家」とか呼ばれて居る人々の考へて居る様なそんな空想家連ではないといふことである。彼等は人類の爲めに大なる意義を有するのみならず、又其れ自身の中に何等空想的な或る物を有たず、そして早晚實現しなければならぬ、否必ず實現するであらう所の事業の爲めに戦つて居るのである。之に對して何程の因襲に拘はれた連中が反對しやうと、何程の賢い人々が嘲笑しやうとそんなことはかまはない。夫れは夜中が過ぎれば朝が來ることが疑ひを要せざる如く、短かゝれ長かれの戦闘の後にエスペラントが早晚國際交通上に共通の使用に入つて來ることは疑ないことである。吾々は是れを單に吾々が欲するからと

か吾々が希望するからとかいふ意味からでなく「かくありて他あるを許さず」といふ單純な論理の結論から敢へて之れを確證するのである。

多分もつと未だ長い年月をエスペラント語派は戦はねばならぬだらう。恐らく尙ほ各種の悪戯者が彼等の上へ石とか泥とか其の他愚にもつかぬことを投げかけるであらう。しかし來なければならぬものは早晚來るであらう。エスペラント事業の創始者達は恐らく彼等の事業の效果の見られる様になる其の時まで生存はしないかも知れない。そして彼等は恐らく兒戯に類することに従事して居る者として悪名と共に其の時代を去るかも知れない。しかし早晚彼等が同時代の人々の手から吞まされた毒杯の代りに後世の人は彼等の爲めに頌德碑を立て彼等の名前を甚大なる感謝を以て讀めたゝえることであらう。

未だ暫くは恐らく彼等は世界に對して無勢力に見える事であらう。まだ幾回となく恐らく彼等の事業は世界に於て死んで埋葬された様にですらも見えないでせう。しかし此の事業はもはや決して死にはしない。何となれば夫れは既に決して死ぬことが出來ないからである。其の事業は生存し、そして始終自身について記憶を喚び起させるであらう。若しもそれが唯十年丈でも繼續することが出來るならば各の新しき沈黙の時の後には新しい復活が現はれるであらう。最初の戦士達

が疲れたならば、早晚又新しい精力に富める戰士達が現はれるであらう。そして其の事業は最後に夫れが完全に其の目的を達する時迄續いて行くのである。だから悲觀するなエスペランティスト達よ。若し馬鹿な連中があれこれに諸君に向つて諸君はまだ非常に少數だと云つて注意してくれても、勇氣を失ふな、諸君の事業が進行が遅くあつても、其の事業は拙速主義に組織されては居ない、唯確實主義である。

多くの無理想な事業が世界の前に急はしく輝きはじめた。しかしそれは又急はしく消え失せるのである。優良な、而して確實なる事業は通常遅く、そして大なる障礙を伴ふて進行するのである。

そこで吾々は再び以上に指摘せる五箇の結論の上へ、無意識に自分の思想の爲めに戦ひ、而して其れ故に反對者の最も小さい注意に於て援助なしに立ち、そして何を答へてよいかを知らず、或は勇氣を喪失して居るエスペランティスト達の個々の注意を向けて貰はうと思ふ。凡べての其の結論は單純にして且つ嚴格なる論理の産物を代表して居る。だから若しも人が諸君に對して『世界は諸君の言語を欲しない』といふならば大膽に答へてやれ『世界が欲しやうが欲しまいが早晚必ず夫れを受取らない譯には行かない。何故なればそれを受取らないといふことは到底不可能だから』と。諸君が『新しい言語が出たさうだとか、或る教育學會や大會が或る種の言語を選ぼうとし又創らうとして居るさうだ』といふ事を聞かされたならば大膽に答へてやれ『凡ての是等の名聲又は企圖といふものは國際語の思想の本質又は歴史の最も獨斷的な無理解の上に建てられたものである。其様な立場の企ては單に一人によつてのみならず又凡ての學會によつても幾回となく繰返へされたものである、そして毎回とも見事に最も完全な失敗を以て終つた。又終らねばならなかつた。そして結局國際語たるべきものは唯エスペラントあるのみである。如何となれば論理の法則に従へば、又事業の本質に従へば他の方法では決して出来ないことであるからだ』と。

若し人が諸君に向つて『だれかれのエスペランティスト又はエスペラント學會なるものが、あまりに大げさな、しかし無分別な熱心のあまりに間違つた道を歩み、その爲めに諸君の全體の事業を嘲罵に値するものとし若しくは信用なきものたらしめた』といふならば、其の時答へてやれ『エスペラント事業は如何なる個人にも屬しなければ又學會にも屬して居ない。だから如何なる個人も自分の私の誤まつた行爲を以て其の運命の上に影響を及ぼすことは出来ぬ。エスペラントの創作者自身と雖も今やエスペラントの爲めには絶対に無勢力である。如何となればエスペラン

トは既に長い以前から純然たる公衆の事業となつて居るから」と。

次に吾々が前に述べた事から来る結果は左の如きものである。即ち「若し國際語の選定が種々の國の代表者よりなる或る大會の隨意になるとせば、吾々は恐らく長く、非常に長く、是を待たなければならぬかも知れない。そして吾々の中の誰も、何か此事の爲めにするといふことは出来ないであらう。」といふことである。併し若し吾々が上に示した様に今や完全な確實さと精密さを以つて、如何なる種類の言語が他日國際的たる運命を持つかを豫見することが出来るとすれば事情は一變する。

吾々はもはや、大會を待つ必要はない。目的は全く明瞭である。各人はそれに到達することが出来る。何を他の人々が云ひ且つ爲すかといふことを注意する必要もなく、各人は其の進捗しつつある建築の爲めに自分の石を運んで來ることが出来る。どの石も失はれはしないだらう。如何なる種類の労働者も此處には他の者に屬しては居ない。各人は各個に自分の力に應じて自分の範圍内で行動することが出来る。そして一層多數の労働する人があればある程其の大建築は一層早く竣功する譯である。特に、種々の學會又は大會を顧みる他の人々が何をして居るかに拘らず他の人々はその仕事の第一歩に着手したか否かをも待たず、各の學會や大會は各個に、大なる人類共

同の目的にせめて一歩でも近かつく爲めの何事でも決定してよいのである。

(をはり)

エスペラントは二十世紀の一大奇蹟なり

マクス、ミユラー

後篇 エスペラント文學論

エスペラント文學論

Pri Esperanta Literaturo

序言 一、文學は如何にして生れるか 二、濫作の詩文に就て 三、エスペラントには傳統はないか 四、傳統的語根の採用 五、言語の自然的發達 六、傳統的語彙は如何にして生滅するか 七、使用さるゝ所に言語は在る 八、笑ふべき言語論 九、何故にエスペラントは成功したか 一〇、單なる語彙は言語を作らず 一、言葉遣は如何にして發達するか 一二、配合せられたる語彙の勢力 一三、言語は固定せる信號にあらず 一四、言語は絶えず異動して居る 一五、言語の統一は共通の使用が作る 一六、初期のエスペラント詩 一七、エス語民族の發生 一八、最初の數年間 一九、「共同エスペラント主義詩集」の時代 二〇、民族を造る勢力 二一、共同詩集は何を證明し、何を教へるか 二二、個人詩の時代 二三、非個人詩と純正藝術的文學 二四、象徴的作品 二五、吾々の創作文藝の一斑 二六、エス語で泣いた詩人 二七、自分の魂をエスペラントに打込む人々 二八、文學と内部的思想とはエス語に必要なりである 二九、エスペラントは提議でなく事實である 三〇、エスペラントは大會代表者又は委員會に屬せず 三一、笑ふべきエス語改造論 三二、論戰の盛なるはエス語の發展を證す 三三、外部に宣傳する

のみならず、内部に向つても宣傳せよ 三四、吾々の文學の將來 三五、人類を分
つ力は又之を結合する 三六、苦惱は統一を作る

序 言

過ぐる二晩の中一晚を此の劇場に出席せられて其の大廣間を通して美はしき、調子よく律格に合へる音節を響かした俳優達の『カーティエ』劇をお聞きになつた方々は一層確實に吾々の言語が文學に適し、そして世界中で最も美しく響く言語の中でエスペラントが自身の必然に高い地位を採ることを納得せられたことと思ふ。

吾々は今第七回大會の組織委員諸氏が吾々の爲めに此の午後の文學的の催しを準備されて吾々の朝の會合の其の幾らか乾燥無味な討議から愉快な息抜きを與へられたことを感謝せざるを得ない。

文學の原野では吾々は一層多く吾々の心を以つて生活して居るものである。そして吾々が吾々を一瞬間でも其の美と信頼の雰圍氣の中へ入れ込むといふことは常に善いことであるのみならず又有益な事でもあり得るのである。如何となれば吾々はさうすることによりて吾々を一層近く吾

々の全運動の内部的思想及び眞精神に觸れしむることが出来るからである。

一、文學は如何にして生れるか

若干の人々は吾々がエスペラントで文學を製造して居ると云つて吾々を非難し、他の人々は吾々が文學を有して居ないといふて非難して居る。其の様な批評たるやお互に矛盾して居る。

一體言語が文學なしに何うして生命を有し得やう、生きた言語に取つて文學が必要なることは實に丁度生きた人間に對して心臓の必要なのと同様である。文學は各の言語に對して之を美化する中心である。其の中へ向つて其の血液は淨化される爲めに流れ込み、そして後に又生きた身體の各部分に向つて流れ戻るのである。言語は唯商業用又は學術用としてのみ御用を勤めることは出来るものでない。

どうして人は或る人々が他の人々より一層藝術的に且つ一層念入れて話す仕方を發見しやうとするのを禁じ得よう？ 各人の内には美に對する或る願望が隠れて居る。既に太古史の時代に於て人々は石の尖片を以て彼等が自身の爲めに倒れた樹の幹から切り取つた粗末な家具の表面に種々な圖形を彫り付けやうと試みた。それが抑も美術の低き起源であつた。

又談話の中で律格に合つた章句を歌ひ、或は平素の仕方より一層美しい仕方でも物語を話さうとする藝術家もやがて現れた。何うして才能ある人が言語を短い早い文句で以て單に賣買又は命令の用にのみ使つて居る所の彼の隣人より一層優美な仕方でも書いたり話したりすることを禁じ得よう。

又如何にして人は吾々エスペランティストが吾々の愛する言語のまゝに合唱することを好むのを禁じ得よう？

實に是等凡ては文學である。そして凡て是等は最も自然な仕方である。

興味あり、且つ深く教訓的な實例を人は夫れについて引くことが出来る。嘗て以前の或るエスペラント大會の際に一人の西班牙の青年と或る碧眼金髪の瑞典少女とが戀に落ちたことがあつた大會終つて二人の男女は遠くへ旅立つてから後も互に文通した。併し青年は瑞典語を知らず少女は亦西班牙語を知らなかつた。唯エスペラント語のみを彼等は共通に有つて居たのである。熱烈な青年は自分の戀を一層美しく表現せんと欲した。そして燃ゆるが如き文句を彼等は彼等の愛の語たるエスペラントを以て書き出した。多分彼等は以前に於てエスペラントの詩を嘗つて見たことがなかつたに相違ない。しかし人が戀する時に於てどうして、其れを散文で書くことが出来よ

う？ 遂に彼れは彼女の爲めに詩を書いたのである……そしてそこに文壇の他の起源がある。之を又吾々は禁ずることが出来るであらうか？

二、濫作の詩文に就て

此の劇場のバルコニーには私は若干の著名なる同志を見受ける。其の方々は多分我がエスペラント雑誌の編輯員諸公が紙屑籠の中へ抛込まなければならぬ様な無價値な悪詩の堆積に就いて回顧し乍ら獨りで微笑んで居られることであらうと思ふ。彼等の方々は心から各のエスペランティストが自分自らを詩人だと自惚れて呉れない様にと願つて居らるゝに相違ない。實際詩作といふことは吾々に取つてはあまりに荷が重過ぎ、そして價値ある詩はあまりに稀である。偉大なる天才は未だ現れて來ない。併し若干の英才を吾々は有して居る。自分の言語に對する大なる熱心からあまりに多數の人々が詩作を欲して居る。そこで眞珠を吾々は山の様な瓦礫の中から探し出さなければならぬ。併しそれは各の言語に對して同様に起ることであつて獨りエスペラント語に限つたことではない。書かれた一萬の原稿の中から、印刷された一千の詩文の中から、讀まれた一百の詩篇の中から——唯一篇か二篇の白珠が見出さるゝに過ぎない。併し數千の無價値な悪詩を

讀んで一二の眞珠を発見する方が其の幾千の詩を有せず随つて又一個の眞珠をも有せないよりはましである。段々と才能ある人々は現はれるだらうし、又段々と名人も何が自分の任務であるかといふことを一層よく理解しもはや悪詩の濫造もしなくなるであらう。凡べての人は同じ仕事をなすことは出来ない。或る人に對しては大なる活動性と精力とが與へられ、他の人に對しては——深き素養と學問上の熟練とが與へられ、而して第三の人に對しては——美しく話し、且つ著作する才能が與へられて居る。甲の人に百姓せしめ、乙の人に人を教へしめ、丙の人に歌を唱はしめ、各人各自の能力に従つて活動せしめるがよい。

三、エスペラントには傳統はないか？

人は又エスペラントはあまりに人工的であり、そして何等傳統を有して居ないと考へて吾々の文學について信用しようとしなさい。其れは説明する必要がある。その意見は間違つて居る。吾々の言語には二つの部分がある。其の一は『第一讀本』の内容になつて居ることであり、其の二はそれ以外の事柄である。

四、傳統的語根の採用

『第一讀本』の中には確に一個の人間が其の長い經驗と著作とをなした後に選んだ幾百の語根が採用されて居る。併し其れ等の語根たるや果して新奇な、任意專斷な、非傳統的のものであるだらうか？ 決してさうでない。如何となれば其れ等は我が歐洲諸國語の中の最も共通的な語の中から選出されたものであるからである。其れ等の語彙たるや決して或る氣まぐれな造語師の手によりて一時に急造されたものではない。其れ等は全く生きた現在語の中から其れ等の單語の有せる長き傳統の全勢力と一所に採用されたものである。

其れ等の語彙の各はそれ／＼自身の本來の歴史を有つて居る。其れ等の各は或る古い時代の民族によりて造られそしてやがて又他の民族によりて繰返へされたものである。其れ等の多數は太古其れ等が亞細亞の高原の上の何處かで原始的な印度ヨーロッパ民族によりて語された時以來既に數千年を経過して幾らかづゝ發音の上に變化を生じて生き残つて居る。

其れ等の語根に附加された若干の文法上の語尾はたしかに任意である。併し其の語尾でさへ又多くの自然語から採用されたのである。發音の綴字法も人工的である。併し總ての言語の綴字法

は嘗つては人工的であつたものである。

五、言語の自然的發達

此の極めて小さな材料（第一讀本のこと）の周圍に其の全體の言語が自然に發達した。ドクトル、ザメンホフ及び最初の著作者達が自分達の所感をエスペラント語で發表して或る生きた雰圍氣を創り出したのである。そして其の雰圍氣の中には其の古い印度ヨーロッパの語根が其の長い以前の生活の全勢力を保存することが出来たのである。

使用して居る中に段々と全く自然に其の言語の中に總ての必要な他の語根が入つて來たのである。又お互に混淆することにより共存することにより、結合することにより、絶えず其の若き言語は豊富になり、同時に夫れは多くの仲間を獲得し、而して日一日と段々に多く使用される様になつたのである。

六、傳統的語彙は如何にして生滅するか

其の新鮮なる空氣の中で非常に美しく其の古い印度ヨーロッパの語根は殆ど自身の古代の傳統

の何物をも失ふことなしに生存して居た。從來提供された多くの言語組織に於ては其の同じ語根が恰も切り取られた小枝の如く乾燥無味な化石となつて居た。如何となれば其れ等は必要な生きた幹を發見しなかつたからである。單に閉ざられた本又はノートブックの頁の上に残つて居た丈では語彙が生存して居るといふことは出来ない。語彙といふものは本質的に動物或は植物の如く生命のある生物でなければならぬ。

然るにエスペラントに於ては其れ等は恰も老木から切り取つた小枝の如く若い言語の生きた萌芽の上に植ゑ付けられて以前よりも一層活氣づいてさへ生存することが出来た。そしてやがて其れ等は其の木を輝ける葉と花とにより驚くべく擴大した冠を以て生長させた。

そこで其の數百の語根は自身の固有の生活を内部から保持した。エスペラント語に於ける他の總ての部分は其の大半は丁度各他の自然語に對して起ると同様に全く自然に創造され又支持されたのである。既に彼の『世界語辭典』の單語の中に於てすらもドクトル、ザメンホフにより提出されなかつたが、しかし其の初期の著作物の中に發見され、且つ單に使用のみによりエスペラントたる權利を得た語根もあるのである。それでも人はエスペラントは人工的であり、且つ非傳統的であるといひ得るだらうか？ 否吾々の言語は反對に大部分眞に自然であり、そして他の自然

漸同様に自身の本来の傳統——無論それは未だ非常に若いには相違ないが——と、幾百千年を経過して来た自身の基本語根の尊重すべき傳統とを有して居ないだらうか？

七、使用さるゝ所に言語は在る

一體言語とは何であるか？ それは文法や辭書の上に横はつて居るだらうか？ 全く否矣。そこには單に其れに關する骨組の注意書が横はつて居る丈けである。本の中に於ても言語は發見されない。併し其れが書かれ、且つ話される所には到る所言語がある。然り言語は玆にある、吾々が話して居る間に、今朝吾々が議論した間に、昨晚やつた朗讀の中に、毎日する吾々の會話の中に吾々の手紙の中に、吾々の雜誌の中に、到る處エスペラントが響く所に、到る處にエスペラントの語句が飛んで居る所に、唇から耳へ行かうと、ペン先から眼へ行かうと、其れには論なく、そこに吾々の言語がある。そしてそれは其處に生存して居る。つまり『其れが使用さるゝ所に言語は在る』のである。

八、笑ふべき言語論争

そこで人が言語の中に於て其れと此れと取りかへた方がよいでないかと云つて議論をするのは全く笑ふべきことである。なる程紙の上に書いた語を抹殺し去ることや、或る文字を他の文字を以て代へることは出来よう。併し言語自身を諸君は如何にして觸れやうとするか、それは實に到る處空氣の中に飛んで居つて、それを何人も捕へることも出来なければ引止めることも出来ないでないか？ 新しい胡蝶を諸君は吹き寄せることが出来る、新しい蜜蜂を既にブン／＼唸つて居る仲間の蜂群の方へ追ひやることも出来る。しかし既に存在して居る言語を除き去ることも、破棄することも出来ない。又諸君は如何なる方法によつても言語を造ることは出来るものでない。言語の語彙と言葉遣とは實に無限に廣い世界に飛んで居る。そして何時かは其の中の若干は随分と長い多くの年月の使用を経て遲鈍になり、退屈になり其れ等自身に段々と飛び方を遅くし、他の新しい一層活氣のある飛行者に對して自分自身の地位を争ふことの出来なくなつた時に限り、自ら引込むのである。

斯様にして言語は生長する。そして其れを世界中に生かし、且つ鳴り響かす所の風ともいふべきものは其の民衆の聲である。而して其の使用各員を結合する所の共通の思想と強大なる感情が其の詩人癡を鼓舞して其の魂、精神を創造するのである。

九、何故にエスベラントは成功したか

「一體言語とは何であるか、又、夫れは如何にして生長するか」といふことを吾々の創作的天才ドクトル、ザメンホフが實際に理解して居たことは彼れの貴い夢想をして驚くべき實現に至らした所である。

彼れは語句とか、言葉遣とか其の他一言にして言へば言語を構成する凡てのものを「使用」といふこと其れ自身に造らせる爲めには出来る丈け少量の材料を與へるがよいといふことを理解して居た。

一〇、單なる語彙は言語を作らず

實に言語といふものは辭書の中にあるのでもなければ文法の中にあるのでもない。しかし語句とか、或る思想を表現する一團の文章の中にある。

ザ博士及び後には益々多くの新しい門人達は自分達の感じを表現する爲めに多くのエスベラント語句を造つた。段々とエス語民族が生長するに隨ひてエスラベントの表現法即ち言葉遣も形成

された。各の他の言語に於ける如く若干の單語はいつでも結合して用ひられ、一團になつて特殊な共通なる力を獲得した。

單獨にはさつぱり意味の解らない、情熱の乏しい單語が他の語と結合されたり連用されたりすると忽ち思ひも依らざる光輝を放つた。

たしかに各の言語の眞の單位は個々の單語でなくして語句や文章である。即ち他の人々の脳髓の中に或る正確なる思想又は正確なる事項に關する記憶を喚起する所の單語の集合である。

一一、言葉遣は如何にして發達するか

例へば諸君が『吾々の』といふ語——それは正確に云へば『吾々』といふ語と『の』といふ語尾とから成立つて居る——『神聖なる』といふ語、及ば『事業』といふ語を三語別々に取つて考へて御覽なさい。さうすれば如何にも乾燥無味な、冷つたい、不精密なものではないでせうか？しかし諸君が若し之を『吾々の神聖なる事業』といふ風に云へばそれは單に三つの單語を結び付けてそれ等の個々の意味をくつ付けたものに過ぎないだらうか？否、反對にそれは一つの新しい不可分な、最も力強い表現法を形成して居るのでなからうか？其の逐字譯が大した意味を有

たす、或は滑稽にすら類するものであるに拘らず、其の言華遣たるや諸君に對して極めて精密で且つ明瞭なものでなからうか？

其れは諸君の精神の中に單に思想とか感情とか、若くは印象とかを喚起するのみならず、しかし又、諸君の心を「吾々の神聖なる事業」の爲めの戦ひに關する特殊の記憶を以て充たして強い感動をさへ喚起しないだらうか？ 其の三つの語の表現たるや諸君に取つて恰も突然諸君の心の奥深くさし込んで來た鋭い光線の如きものではないだらうか？

又其の短い文句は他の言語では同じ三語でも恐らく無意味であるのに獨りエスペラントで言ひ表はされるとそれは諸君の全生涯の可なり重要な部分を含んで居るでなからうか？

一一、配合せられたる語彙の勢力

以上の小例は以て何れ丈けの生きた力が一の言葉遣の中にあるかといふことをよく示して居るでなからうか？ 又夫れは以て各の言語の單位が語句であるといふこと、詳言すれば其れ自身に於て聴衆の内界に恰も威靈ある鐘が其の餘韻を靜かなる空氣の中に響かして、或る棺桶然たる箱の中に閉置されたるヴァイオリンの弦を震はせる如く神秘的な或る物を響かせる不思議な能力を

含蓄して居る所の語の集合即ち語句であることを了解せしむるに足るものでなからうか？ お互に助け合ひ、又結合されることによりて語彙は無力なものから一つの強い力を創造するのであるそして其處へ即ち或る小團の或る感じ得べき弱點の残つて居る處へ、やがて新しい必要な語が全く他のものゝ自然の呼聲に應じて這入つて來るのである。それは長い年月に見れば豫期することが出来ることが、しかし若しも夫れが或る造語師によりて獨斷的な辭書の中に全く單獨な語として提出されやうものならば到底其の門を通することは許されないであらう。その點は恰も生きた存在物とかはりない。

一二、言語は固定せる信號にあらず

國際語は丁度或る國際委員によりて定められ、規則づけられたる海員信號の様なものではなければならぬと考へて居る人々がある。其の様な人々は幾十年と勉強した處で其の目的を達することは出来ないであらう。人は少しの單簡な事なら之を發表する爲めに信號を有つて居れば十分である。例へば既知の命令を發するとか呼び掛けをなすとかの如きそれである。しかし單なる信號を以て全言語に代へるといふことは到底出来るものでない。

Cu tu si ne
estas exa ya tradido

確に言語の組織が若し單によく整理された辭書と、種々の國語に對する譯語とのみから仕組まれて居るのならばそれは信號たるに過ぎない。生命のない文字は譯語辭典の中にもたゞ語彙として残つて居る丈けである。恰も石ころの如く人々は之を種々の國語の成句を翻譯する爲めに彼是と配置しなければならぬ。さう考へて之と同様なる組織の言語を提供する人々は途徹もない失敗を演ずるのである。

一四、言語は絶えず異動して居る

彼等——國際語を信號と同一視して居る人々——は一體言語が不斷の異動の中に生きて居るといふこと及び普通の談話に於ては常に二個の異なる國の語は全く一の精密な意味に停つて居るものでなく、そして絶對に一が他に符合するものでないといふことを知らないだらうか？ 斯の如き翻譯辭典を國際委員會は絶えず管理し、變更して行かねばならず、又其の單語の意味が常に或る決議によりて左右せらるゝものとせば其の統一といふことは永久達せられないのかも知れない。吾々の既に知つて居る組織の上にて居ることが最もよく其の事の經驗を説明して居る。蓋し、生きた或物を人は死んだ他物を以て翻譯することは出来ない。又他の側に於て人々は翻譯のみを

以て満足することは出来ない。

國際語は生きたものでなければならぬ。如何となれば生きたものゝみが、換言すれば語を結合する所の使用法に於てのみ、~~然~~言語は完全なる明瞭さと統一とを達することが出来るからである。

一五、言語の統一は共通の使用が作る

『使用』といふことは唯一のよき辭書である。其れでこそ總ての國で人は語の正しい意味を翻譯なしに、又權威ある決定なしに學ぶことが出来るのである。賢明なる言語委員會又は美辭書編纂者は最も高い自分の仕事として他の人々を援助する爲めに良心の命令によつて使用に關する報告をなさんと氣を付けて居る。吾々は常によく次の様なことを記憶しなければならぬ。

『言語の統一といふことは唯共通なる使用といふことのみが之を保持する。』

一六、初期 에스ペラント詩

エスペラント文學はザ博士の最初の著作を以て始まつた。夫れで吾々凡べての知つて居る其の若干の詩は彼れがエスペラント語を世界に公表しない以前に作つたものである。

どうか其の準備時代の彼の傳記を読んで貰ひたい。遺憾乍ら彼の傳記は未だ十分完全に著はされて居ないが（譯者註、ザ博士傳記は一九二〇年講演者ブリヅア氏の名著「ザメンホフ傳」が出て居る。本講演は其れ以前のものである。一讀を勸む）彼の苦悶と孤獨の困難な時代について讀まれたならば、諸君は如何なる精神状態が彼れを感動せしめ夫れ等の詩を書くに到らしめたか理解せらるゝであらう。例へば次の様なものがある。

我が思ひ

……火を我れは心の中に感ずる

生きんとも亦我れは思ふ。……

何物か我れを永遠に逐ふ、

我れ若し愉快な人々の方へ行くならば……

若し我が努力と勞働が

運命に氣に入らぬならば——

來れ、直ぐ我れに、死よ

希望の中に——苦痛なしに——

努力なしに吾々は一八八七年の其日に於けるエスペラント博士の感動を想像することが出来る。恰も彼れの國際語に關する最初の小冊子が出版されて世界中に發送された時のことである。如何によく吾々は彼れの不安な心持を理解することが出来るであらうか——

オ、我が心

オ、我が心、不安に動悸打つな

我が胸より今飛び去るな！

もはや我れは容易に我れを支へることは出来なくなつた

オ、我が心！

オ、我が心、永き戦ひの後に

我れは決勝の時に勝たぬだらうか

もう十分だ！ 戦ひから靜まれ

オ、我が心！

一七、エス語民族の發生

併し段々とやがて返書は到着した。毎日一通二通、二十通三十通と幾百の返書は恰も輝き昇る旭日の光の如くであつた。吾々はザ博士が彼れの事業の園りに新しい民衆の生れ出でたるを發見した時如何に喜んだか想像することが出来る。如何となれば彼は單なる賞讃と慰安とを與へられたのみならず、又多數の眞實なる贊同者と彼れの言語を學ばんといふ多くの約束と、而して中には國際語で書いた手紙でさへも受取つたからである。

一八、最初の數年間

吾々の運動の熱心な初期が開かれた時にはどれ丈けの熱誠と、どれ丈けの犠牲心と、どれ丈けの驚くべき同胞觀念とが見出されたことであらう。其の時此の幼い言語に對して仲間達は『エスペラント』といふ美しい名稱を與へた。それは嘗て謙讓なるザ博士が今では赫々たる自分の本名を置した所のものであつた。其の時此の新軍隊の兵士共の間には緑の色が人氣あつた。如何となればそれは希望（譯者註、平和の誤植？）を象徴して居るからである。其の時に又緑の星が現はれ

た。それは吾々が現に到る處に輝かしつゝある徽章である。又其の時に吾々の共通の聖歌たる『エスペロ』『希望の歌』の愛すべき言葉が世界の各地へ擴まり而してやがて百千の異なる國民の聲によりて唱はれる様になつた。

一九、「共同エスペラント主義詩集」の時代

其の頃に又ザ博士の側では新しい詩人達が人類の同胞的結合に對する歡喜を歌ふ爲めに、倦むなき種蒔きに對する呼び掛けを歌ふ爲めに、又最後の勝利に對する希望を歌ふ爲めに頭を擡げて來た。吾々の文學の其の純粹なるエスペラント主義時代を吾人は『共同エスペラント主義詩集』の時代と名付ける。其の時期の最も典型的な詩は『兄弟達に』といふ詩である。之を以てザ博士は凡べての蒔き散らされた仲間の戰士達に對し斯んなに美しく話して居る。

……甚だ遠く總て吾々は立つて居る、一部の者は他の者から離れて……

何處に君達は居る、何を君達はして居る、オ、君達我が親愛なる兄弟達よ！

其の純粹にエスペラント主義なる文藝は屢々單純で可成り幾らかタワイもないものゝ様にすら見える。しかしそれは全く自然に書かれたものであつて到る處に其の新しい民衆の熱烈な希望に

充ちくた感激によりて作られたものであつた。其れ等の詩篇たるや、多くの彼の愛國的文藝作品の如く、其れ自身の中には非常に單純な何等要求のないものであるに拘らず、又同様に大なる價值を有するものである。如何となればそれ等は全民衆の感じを表はして居るし、其れ等の觸れる處に人は全群衆の精神を震動させる様に感じ、又其れ等の詩句たるや嘗つて地球上凡ての國民の子孫によりて百千回も好んで繰返され、且つ今も尙ほ繰返されつゝあるものだからである。

二〇、民族を造る勢力

フランスの思想家エルネスト・ルナンは或る所で斯んなことを書いて居る。

『人間が一の民族を形成するといふことは共同して爲した偉人なる事業に對する彼等の記憶及び新しい大事業を共同して實現せんとする彼等の意志が其れを造る。』

と、然り而して人は正確に其の記憶及び其の意志をば其の共通の詩の殆ど各行に於て發見することが出来るのである。それ故に其れ等の詩は最も善く吾々のエスペラント語民族の存在を證明して居る。而して彼等は其の存在を證明し、且つ來るべき時代に於ても證明し續けるであらうが又更に其の困難なる開始、其の冷笑と迫害に對する倦むなき戦闘、大なる道德的勇氣と希望に滿

ちたる忍耐以外何等の武器を有せざる其の平和なる戦ひを併せて證明して居るのである。

二一、共同詩集は何を證明し何を教へるか

其の精神に充ちくたる文學たるや其の中に小銃が響いて居るのでもなく、大砲が轟いて居るのでもないが何時かは多分人類に教へるであらう、『最も大なる勝利は死なく、破壊なく、屠殺なしに得られるものである』といふことを。しかし斯の如き勝利は血腥き戦に出る兵士よりも一層勇氣ある兵士がなければ得られない。其れ等の高貴なる平和の戦士達の歌集は常に其の共同エスペラント主義の詩として残るであらう。而して其れ故に彼等の偉大且つ謙遜なる質朴さと共に吾々は彼等を敬して保存し且つ完全なる尊敬と愛とを以て珍重するであらう。

二二、個人詩の時代

段々とエスペランティスト達は大なる家族に於ける一員として自身を感じる様になつた。そして彼等は自分の周圍に非常に遠い所に於てさへも友愛と同情の温き雰圍氣を見出して、之を味はひ樂んださうして居る内に段々と若干の詩人達は勇を鼓して自分自身の固有の喜び、又は惱みに

ついで歌ふ様になつた。

斯くて吾人が『パーソナル・リテラチュア個人文學』と名ける時代が生れた。無論其の文學も亦非常に單純な且つ屢々拙劣なものであつた。其の詩人達の中の各人は自分の心のまゝ又は自分の才能に隨ひて何物かを談りはじめた。

唯後に將來に於てのみ偉大なる詩人は出るであらう。しかし既に人は其の詩の中に於て一度ならず、多くの輝ける光線を賞嘆することが出来る様になつて來た。

諸君は既に氣付かれたでせうか、如何なる力強き發光體でも極めて小さな打碎かれたガラスの小片ですらあり得るといふことを？

其の上へ窓を通して、或はカーテンの割目を通して太陽の弱い微光が落ちる。さうすると見よ突然其のガラスの小片は四方八方に全室を通して各色の燦爛たる光線を反射するではないか！其の卑しいコップの破片が天の靈光に浴したお蔭で一秒間で眩きする程發光する爐となつたのである。

全く同様に最も卑しい精神も屢々四方八方へ最も美しい光を放つことが出来る。若しも天才の靈光が唯適當な場所で夫れに觸れたならば。

二三、非個人詩と純正藝術的文學

しかし既に吾々の仲間の中に眞の藝術家は現はれた。彼等は吾々の言語の氣持のいゝ美音を利用してそれで一層六ヶしい、一層堅い藝術を造ることを知つて居た。エスペラントの音樂的音調から彼等は恍惚たる諧調をつくることを知つて居た。その幼い色彩多い言語から彼等は豊かに押韻された音節の美しく結び付けられた珠玉を彫刻することに成功した。

二四、象徴的作品

他の人々は吾々の若い高翔せる言語の深き象徴的な價值を感じはじめた。そして彼等は吾々に迄象徴的な作品を與へるべくはじめた。其の中には氣持のよい押韻や金翅の様な表現が吾々の精神の中に最も繊細な感を喚起し又は吾々の中に其れ等の既に永い間忘れられた印象——其の印象たるや元來人が喚起することは出来ても、之を書き表すことは決して出来ない種類の印象である——を再生するのである。

吾々の文學の將來は恐らく其れ等の藝術家達に屬するであらう。しかし吾々は先づ吾々が其の

非常なロマンチックな時期を有ち、吾々の言語の中にそれだけの生命と豊富さとを採り入れる必要があるのである。

二五、吾々の創作文藝の一斑

吾々の文學は勿論未だ非常に狭い範圍に限られて居る。しかし何程かの財寶は或るエスベラント文庫の凡ての書冊の種々の標題及び種々の色彩の表紙の下に匿くされて居る諸君の室の中のエスベラント書架の上にある緑や赤の背表紙の後に印刷された其の多量の頁の間に、如何なる大量の人間の經驗が、又どれだけの微笑が、何れだけの涕泣が集積されてあるでせうか！

翻譯の方面に就いて話すのは御免を蒙りたい。之を以て外國の同志は吾々に各自國の著作者の思想と技巧とを傳へて呉れたものではあるが、兎に角今日は吾々は單に創作文藝に限つて、御話致しませう。吾々は其れ等の冊子を開いて見よう。そして頁から頁へと吾々のすきな著作者達について行つて見よう。

生活の道の上に於て、自分等の既に長い、或は短い進行の間に彼等は緑の岸の上に生長しつゝ、ある美しい花を見出した。そして之と同時に又刺を——然り鋭く尖つて居る刺を——彼等は見出

した。時には非常に多くの夫れを見出した。

しかしそこで兎に角若干の人々は吾々の爲めに幸福の花束を造つた。其の新鮮な好い香りは到る所へ、心の中へ喜びを運んで行つた。

又若干の人々は心地よく自分達の希望の花束を抱愛した。しかし強い速い風がやつて來た。そして彼等は其の好きな長く愛して居た希望が情なくも遠い彼方へ、散行く秋の黄金色の木の葉と共に八方へ吹き散らされて行くのを見た。

更に他の人々は何物も有たず、又何物をも失去つて、勇敢に刺ある茨の下で搜索して、遂に他の人々によりては決してそんなものがあらうなど、疑はれた事のない所で可成りに美しい幼芽を發見した。そして彼等は勇敢に其の小芽を其れ等が輝いて太陽の下で花を開く迄面倒見てやらうと決心した。丁度同様に吾々は屢々生活に於て大なる幸福を發見することが出来るかも知れない若しも吾々が單に他の人々が茫然と通過して了う所をじつと凝視めて行く勇氣さへあつたならば或る人々は夕方に美はしき寺の鐘の音を聴く爲めに立止まつた。他の人々が同じ道をすんぐり通り去つて恰も氷蝶々が各色の花房の美を吸ひ乍らあちこちと飛んで居る様に野を通して彷徨うて居る間に。若干の人々は聲高く夜を通して自分の燃ゆるが如き熱烈なる呼び掛けの角笛を吹き

鳴らした。

最初の人々は惱みにより疲らさせられて聲低く惨き運命に對する不平をぶつくした。しかし他の人々は自分達の人間的反抗を恰も泡立つ瀑布が山から山へ雷鳴の如き反響を鳴り轟かして、谷の方へ耳を聳する如き音を以て充たしつゝ、碎け落つる様に水に流した。

一度ならず沈み行く太陽が夕の空を紅く染めなし、又は山の上や雲の上に黄金色又は藍色のヴェールを投げかける時には一人ならず新たに閉ざされた墓の傍に靜に立ち止つて、其の中へ彼れの全幸福を滑り去しらめた人の上を默想した。

二六、エス語で泣いた詩人

上述の人々の間に吾々の一詩人があつた。其の人は遠いシベリヤの方から歌つて居る。諸君は既に其の無題詩を御承知でせうか？ 其の詩の中で彼れば自分の『緑の火の子』といふ題の初めの所に、若い愛妻の急死の後の悲をこんな書いて居るが――

纔か十年経つか経たぬ前に

許婚のヴェールを被つて

花飾を髪には挿んで

彼女は我れと祭壇の傍に立つて居た。

そしてその花飾は生命のない

人間の手で造つた魁花であつた。

さはれ歎び楽しんだ二人は心の中で

冬の寒さも餘所にして……

そして今約十年の後に

殆んど同じ花飾の中に

髪には十分活き満てる生花を以て

彼女は再び祭壇にまで歸つて來た。

運命の奇しき意志によりて

彼女は死んで棺桶に横はつて居る

そして我れは泣いて居る、力なく泣いて居る

五月の新緑も餘所にして

一の言語の中に人が其の様に泣き得た時に人は其の言語が生きて居るといふことを確め得るのである。如何となれば其の中に人々は感動し、其の中に彼等は自分等の精神を置くことが出来るからである。そして吾人は此の詩の中に押韻が少く且つ貧弱であるといふことや、又其の中の一
行の詩句が正しくないといふことや、或は一層多くの藝術的な、一層美しく結ばれたエスペラン
トの詩篇を吾人は既に讀んだといふことなど氣にかけないのである。

吾々は實際知つて居る、ロマノ、フレンケル（上述のシベリヤの詩人の名）の詩集の中の他の
凡べての詩は完全なる珠玉であつて、其れに比すれば此れは忙しく顛へた手で書かれたものであ
るといふことを。しかし私は此の詩を讀み乍ら、吾々が吾々自身の内部に繰返しつゝある人間の
必臆の鼓動を聴き、そして其れは何うしても眞に生きた言語の中に於ての外決して書かれ得るも
のではないといふことを確かと證明し得たのである。

二七、自分の魂をエスペラントに打込む人々

吾々の詩人達は吾々に幾らか自分自身のことについて語つた。彼等は吾々の言語にまで自分達の
の深き人間的な印象をエスペラントの中に表現して自身の固有の魂の鳴動を共通にした。彼等は
言語の生命を自身の歌好きな聲で助けた。そして左様にして彼等は吾々の爲めにのみならず又將
來のエスペラント全民衆の爲めにも働いた。吾々の詩人達に對して、然り其の最も卑いものに對
してすらも吾々は全心から感謝しなければならぬ。如何となれば言語に於て人々が最早や翻譯す
るでなくして、しかしそれで考へ、單に考へるばかりでなくして、夫れで感じ、其の中に全ての
自分の心をぶち込む時に、其の時に始めて其の言語は『生きた言語』であるといふ必然に確實
な事實となるからである。

二八、文學と内部的思想とはエス語に必要な力である

吾々は實にエスペラントの中心勢力ともいふべきものは其の内部的思想と其の文學であるとい
ふことを知つて居る。

それ故に其の二者を吾々を嫉妬する人々は攻撃して吾々の運動を妨碍し、吾々の言語を減さうとして居る。しかし其の攻撃は無効である。彼等は吾々をあまりに感傷的であるといつて非難して居る。そして彼等は時に吾々の運動のあの賞讃すべき事柄迄も冷笑することすら敢てした例へば盲人の爲めの奉仕事業の如きそれである。

そんな冷笑は憤慨にすら値しない。唯聞かん振りしておく方が最も善いのである。

吾々は決して恥ぢない。却つて反對に高く誇るのである。如何となれば吾々の言語たるやそれ程有用であり、それ程美しくあり、人はそれを役に立たせることも、それで泣くことも出来るのである。若しも夫れがセンチメンタルだと言はれ得るなら吾々は何等憂ふるを要しない。然りセンチメンタルだとしておけばよい。如何となればその方が確に、撓みなき編輯及び各自の改良が他日提議された無生命の言語組立の成功を助け得るよりも一層多く吾々の言語の生命及び善い評判を助けるからである。

二九、エスペラントは提議でなく事實である

吾々は決してエスペラントを提議事項として考へてはならぬ。『若しもエスペラントが成功する

ならば……』とか、『エスペラントが成立した暁には……』とかいふことを止めよ。

既にエスペラントは成就して居る。如何となればそれは生きて居るから。既に其れは成立して居る、如何となれば其れは實際に使用されて居るからである。

吾々は提議することを止めなければならぬ。如何となれば提議すれば人は容易に納得しないからである。吾々は益々實行しよう、各種の仕方で言語を使用しよう。吾々は吾々の團體を生長させ花咲かさう、そして全世界に對する模範を示さう。

吾々はあらゆる人々に對して彼等がエスペラント語を學んで呉れる様に何卒など、云つて宣傳はしない。そして吾々は時々他人のことは抛つて置いて自ら吾々の小天地でエスペラントを使用して働かう。そして吾々は吾々を公衆の方へ向けた時には謙遜でありたい。併し幾らか誇を有つて居て、何卒など、お願はしたくない。唯簡單に——そしてつゝまじやかに——吾々は説明してやらう、エスペラントがよく其の機能を發揮せるものとして、其れが美しく生きて居るものとして、其れを既に幾千萬の人々が實用に使用して居るものとして指摘しよう。何んな役目をそれが毎日なして居るかを U. E. A. (萬國エスペラント協會) の統計せる所に従つて示さう。その點に對しては吾々はあまり多くの呼び掛けは附け加へまい。

吾々は人々に對しエスペラントは全く彼等を要しないと説明することすら敢てする何となれば其れは既に彼等なしに頗る善く成功したからである。

其の事實を見た時人々は恐らく斯う考へ付くでせう。即ち「屈笑はるべきものは吾々ではなくて彼等であるといふことを。何故となれば其の様な價值ある事業に對し彼等は既に参加して居なかつたからである。

それは丁度彼のフランス人達が馬鈴薯をバルマンチエが只でやらうと言ふた時には貰ひに來ないで、バルマンチエが之を提供することを中止し、其の畑を嚴重に圍ひしてから夜ひそかに盗みにやつて來た様に、人々は屢々エスペラントを學ぶのである。

譯者註、バルマンチエは佛蘭西に初めて馬鈴薯を普及した人である。最初彼れが東印度から輸入せる馬鈴薯を人々に只で與へると言つたけれども誰も貰ひに來るものはなかつた。そこで彼は一策を案じ、其の畑を嚴重に圍ひして番人を付けて守らしたので人々は皆ては馬鈴薯は左程に貴いものかとして其れを盗みに來たといふ有名な話のことである。ブリヴァ氏はエス語もあまり宣傳すると人々が學ばないといふことを之に譬へて諷刺したのである。

彼等は最早エスペラントが彼等を要求しないと感ずる時にやつて來て、彼等が實際エスペラ

ントを要する時には學ばないのである。そこで吾々はいつでもそんな方法を見棄てやうと思ふ。何故なればさうすると何だか吾々の仕事はまだ不確實な、定らない、單なる提議に過ぎない様に考へられる恐れがあるからである。吾々は決して提議なんかしない。吾々は唯やるのである。説明するのである。

三〇、エスペラントは大會代表者又は委員會に屬せず

暫く吾々は吾々の言語の全小史を一瞥しよう。私は『小歴史』を話す、何となればそれは單に四分の一世紀を経過したばかりだからである。假令それが吾々に取つては非常に長い様に見えるけれども。

高い遠くの小路の上でそこに全く孤獨で吾々の創案者が歩いて居る。よく耐へ忍んで又深く思ひこんで。そこへ他の小路から僅かばかりの最初の先驅者達が勇氣凛々しく且つ希望に滿ち溢れてやつて來た。處が今や段々と各方面の街路から一層多數の戰士達が走せ加はつて來た。團體それから團體と擴り行く道の上に結合する。そしてソラ御覽なさい、長い行列造つてエスペラントイスト達の強い軍隊が前へへと進んで居る。

『眞直に、勇敢に、横へ向かすに』と彼等は一團になつて高い樅の木の間にある廣い白い道の上を進んで居る。其の樅の木の永遠に緑なる色を彼等は自分達の旗幟として採用した。見よ熱心な若者達が炎の如き凝視を有つて居る。見よ賢明なる人々は靜かに進んで居る。見よ白髮の老人達は吾々にまで其の賞嘆すべき熱烈な若返つた感激を齎らして居る。見よ歌へる彈唱詩人達や、科學者達や、勞働者達を、見よ何物にも臆せず時々第一線に於てすら戦ひつゝある婦人達の聯隊もあるではないか。

そこで吾々は其の眞實に到る處廣大なる世界を通して種蒔かれたる其の軍隊が強く結束された信頼の力を以つて、恰も其の各員が眞にお互に手を取り合つて進むのを見る時に吾々は斯う考へざるを得ない。『吾々とは何であるか、代表者か、委員か、二千の大會出席者が、一體吾々とは何であるか、議論か、決議か？』弱い麥稈の屑片で吾々はあるのである。其の印象深き歴史と、其の熱心の強い暴風とを伴へる其の大軍隊の前にありては。

若しも之れが吾々に何等かの信頼を與ふるならば吾々はその爲めに働いてやらなければならぬ到る處單に役に立つ下僕及び勇氣の鼓舞者として。

要するに其の大きな群衆にまで、其の巨大なるエスペランティスト民衆にまで吾々の言語は屬

する。決して吾々に屬するのでもなく、又或る委員會に屬するんでもない。

三一、笑ふべきエス語改造論

若しも吾々が一瞬間でも今そんなに美はしく生長し、常に多數の民衆によりて使用せられて居るエスペラントの驚くべき發展について考へたならば此の語について彼是と論議することゝ聞くのは全く笑ふべきものにか見えぬ。(譯者註、此の項はイード運動に一矢を報ひたのである) 或る人々がこの事の爲めに熱心に働く代りに議論をして自分の時間を空費し、目的格を廢止するがよいとか、綴字法を變へるがよいとか云つて、自分等が議論をして居る間にエスペラントが非常に美しくヅン／＼と生長し、且つ既に印刷業者はエスペラント書を出版する爲めに必要なるスーベル、シグノーを買ひ込んだことを忘れて居るのは了解し難いことである。

左様な議論は常に吾々に取つては恰も美しい雪の原に於ける黒斑の足跡の様に見える。徒に彼等は廣い眞白な雪の原を汚して居る。既に作られた小徑の上に人は多く益々速く平原を通行して居るといふことを忘れてゐる。しかし絶間なく更に新しく純白な雪は降つて來て間もなく其の斑點も消してしまふのである。

雪片又雪片、白いピロードは降つて居る。そして段々と地を蔽ふて其の草や木を庇ふて居る。その草や木はやがて春の明るい光線が到る所榮光ある青天の下に花を咲かすであらう。

三三、論戦の盛なるはエス語の發展を證す

言語の改造を目的としないで時々吾々のエスペランティスト仲間の間には丁度凡ての眞に生きた民衆の間に於けるが如く議論とか争論とか、最も熱心な實行者とか、最も有力な雜誌とかの間に起ることがある。そんなことは全く自然のことであまり心配するに及ばない。

夫れは單に吾々の團體が元氣よく生きて居るといふ證據たるに過ぎない。同じく吾々の大會に於ても稀に穩かな論争が起ることがある。或る人が他の人に氣に入らない様な提議をなしたとか或は他の人に氣に入らない方法を用ひたとか、若干の人々が著作をすると他の人々がそれを善く見てくれなかつたとか、又は嚴正に批評したとかいふのがその原因である。そんな論争はそれ自身凡ての人々の熱心を示して居ないだらうか。彼等が吾々の言語に對し最も効果のある宣傳、最も善い著作を要求して居るからでなからうか。寧ろ吾々が死んだ様になつて吾々の興味を失つて何が起らうと何が出版されようかと賛成するでもなければ批評するでもなく放つておくといふ方が

一層悲しむべきことであらう。

幸なことに吾々の議論の中には決して國民對國民の感情は擡頭して居ない。單に方法對方法の争ひ。記者對記者の争ひで時々は同國民間に於てすらある。エスペラントは實に平和を各國民間に生長させる——夫れは最も賞讃すべき效果である——そして議論をばそつちの方へ、即ち其れが屢々有用であり、且つ活氣付ける方へ、押しやつて了つた。もはや血統對血統、信仰對信仰の争ひはない。唯脳髓と脳髓、思想と思想の争ひがある丈けである。其れ等の論戦の中から光は燦き出して居るのである。

三三、外部に宣傳するのみならず内部に向つても宣傳せよ

吾々の宣傳運動は單に外部に對してやるのみならず、又内部に對してもやらなければならぬ。どんな場合でも、例へば詩を読んで居るとか、何か善いことがあるとか、大會に出席して居るとか、ザ博士又は其他の或る人を引きつける様な經驗家と談じた時とか、其他同様の場合に於て吾々が新しい力又は一層新たなる熱心を汲み得たならば吾々はそれを單に吾々自身の爲めに保持するのみならず、又他の同志に傳へなければならぬ。吾々が丁度獲得した所の其の歡び、其の確

信をかゝる幸福に浴し得ない又かゝる報告に接し得なかつた友人達にまで傳へてやらなければならぬ。

彼等に説明してやらう、吾々の言語が生きて居るものとして、若し彼等が其れを未だ理解して居なかつたならば。彼等に吾々は指摘してやらう、美しく其れが生長し且つ花咲いて居るものとして、若し其れを彼等が自身に遠い偏僻に居るとか、手離し難き仕事場に居る爲めに氣付かずに居るのならば。彼等に迄吾々は讀んで面白かつた本を勧めて讀ませう。又彼等を刺戟してやらう、彼等が其の言語を用ふる様に、そして彼等に此れが最も實用になる様に教へてやらう。彼等に對して吾々は兄弟として援助するの義務を有して居るのである。彼等にエスペラントの奇蹟を示し其の事實に觸れしむることは吾々の義務である。

若しも人々が一時の熱心からエスペラントの團體を作つても單に初めの二三年だけ熱心であつて夫れを擴張し、若しくは維持することすらもなすことを知らなかつたならば夫れは全く無益であり、時には邪魔ですらあり得るのである。凡べての成員がお互に勇を振ひ起し絶えず助け合ふところの團體だけが眞に有力な團體である。

三四、吾々の文學の將來

無論吾々の若い原作の文學は未だ非常に狭い範圍にある。單に數十人の著作者しか吾々は是迄に有して居ない。しかし新しい才俊は次から、次へと輩出しつゝある。だからいづれ吾々の文學が『人類の文學』に段々なつて來れば必ず偉大なる事業と極めて高き役割を夫れは演ずるであらうと思ふ。一方國語の文學の側に就いて考へて見るに國文學は人間の心に最も近い、最も親しみのあるものとして永久に残るであらう。(譯者註、エスペラント文學は決して國語の文學に取つて代らうとするものではない) エスペラントは段々自身の固有な、他の物が未だ占領して居ない――本領を占めやうとするものである。其れが現在迄になして來た様に、何物をも破壊せず、しかし常に建設しつゝ、其れは多分吾々に眞の『人間の文學』を與へ得るであらう。

今や國語の文學が漸次に民族的、地方的になり來れるは何處でも注意すべき現象である。著作家達は自國語に於ては彼等の同國人が感じ且つ行動する様な仕方で發表しやうと努めて居る。同様に我がエスペラント著者達は又最も多く先づ第一に吾々のエスペラント的生活について話すべく努め、吾々の同志の關係を書くべく努め、一言にして云へば吾々の新しい若い民衆の精神を表

現しようとするのである。最も幸なことには今や藝術は到る處に於て一の特殊なる民族や地方の固有の感じや印象の繊細な研究をすることになつて居る。

そこでエスペラントは其の感じや、愛や、苦惱や、喜びを表はさうとするに當り特に何の地方を對象として表はさうといふのではない。フランス人でもなく、白耳義人や瑞西人の其れ等についていふでもない。全く生活の事實の前にある「人間」の其れ等について表はさうといふのである。

一體然らば種々の國民の各員に對し、同じく共通な、純然たる人間的の感じといふものが果してあるだらうか——未來のエスペラント文學は之れを研究し、説明し得るであらう。

三五、人類を分つ力は又之を結合する

過ぐる七月、倫敦で開かれた萬國人種會議に向つてドクトル、ザメンホフは其れに關する極めて重大な報告を送つた。其れによれば人間をお互に分つ所のものは主として言語と宗教の不同であるといふのである。彼れは其の差別の原因を撤廢する爲めの方法の一としてエスペラントを擧げた。

確に世界には人間を差別する幾多の事實がある。併し又之を結合する若干の事實もある。後者

の中のひとつとして苦惱がある。人間の惱みといふものは何處にもある。其れは何人も知つて居る。そして其れが又最も美しき統一を作り出し得るのである。

茲に大洋の上へ遊びにボートで漕ぎ出した海岸の町の子供達があつたとする。然る時に不圖もそこへ暗い恐ろしい暴風がやつて來た。見よ夕方の港の埠頭には多數の女達が震へ乍ら立つて居る。彼等は多分其の子供のお母さん達で、自分の愛兒等のかへりを待つて居るであらう。風はビュー／＼と音を立て、亂れ髪は吹きさらされて居る。大浪は岸にぶつ付かつて恐ろしく音を轟かし、泡沫は女達の顔へぶつかぶさつた。そこには素朴な漁師の貧しき妻達も居れば近所のホテルから來た外國の紳士達も居る。又町長とか銀行家達の豊かに着飾つた夫人連も居る。

確かと前の方の黒い大洋を眺め乍ら、凡べての者はピリツともせず、半ば化石せる如くになつてそこに立つて居る。各人の心は同じ考でズダ／＼に引き裂かれて居る——多分大洋は凡ての愛兒等を呑み込んだだらうと。今や其の女達の間にある差別があるだらうか。或者は外國人であるとか、或者は他の者の上級に立つて居るとかいふ考が起るだらうか。

否矣、其の氷の様になつた一瞬間に於ては凡ての者は單に母といふ——心を壓しつぶされた母といふ——ものになり切つて居るのである。即ちそこに苦惱は一致をつくるのである。

三六、苦惱は統一を作る

而して同様に全世界を通して苦惱は屢々自分の大きな神秘的な手を下して到底夫れが出来さうもない所に急に不思議な力強き統一を作ることがある。火山の破裂とか、一夜で幾多の都市や村落を破壊して幾千の人間を宿無しにする様な破滅的大地震の時とかには吾々は地球上の凡ての國民が恰も愛し合つて居る兄弟の如く惱める人民を救助する爲めに一致するを見るではないか。オ、しかし遺憾乍ら其の様な友情は長くは續かない。

しかし世界には常に若干の苦惱といふものがないことはない。そこに種々異なる民族の間に人間が一致を見出す多くの機会が横はつて居るのである。

除き難き苦惱に對して避け難き人間の悲みに對して到る處に、凡ての國々に勇敢なる戰士達は頭を擡げて居る。其の人達の一致を既に吾々の愛すべきエスペラントが助けて居る。そして多分其れは永久に成立つて行くであらう。

吾々の左様に廣大に組織されたる萬國エスペラント大會を以つてエスペラントは既に人々の爲めに種々の機會を助けて一の國から他の國へ、一の都市から他の都市へと人類間の交通を容易に

し乍ら、偉人なる奉仕をなした。

又吾々の文學を以てエスペラントは到る處美と同情の偉大なる擴大の方便として人類の爲めに奉仕することが出来るのである。

廣大なる大洋を何等かの方法で渡つて來た是等の印刷された頁を以て不幸な苦悶者は幾らかの愛と、幾らかの同情と、多分、勇氣と、時には瞬かき希望の灑々たる光をさへも受取ることであらう。斯様にしてこれ迄お互に相知らず、お互に嘗つて顔を見知らなかつた人間の精神は世界で極めて接近して共に泣き、共に喜び、共に賞めそして其の心を以て兄弟の如く共に生き、人生の道へ前へ行く爲めの適切なる考を以て自ら助けることが出来る様になるのである。

そして又自らの文學を以つて常に建設ありて、破壊なく、吾々のエスペラントは引き續き最も大なるもの、一であり、人間の間に一層大なる善、一層大なる美、一層健全なる光を作る爲めの最も眞直なる道の一であり得るのである。

強く吾々は立たう、大膽に働かう、勇敢に、オ、吾々の團體よ！

吾々の事業を生長させ、花咲かさう、吾々に依りて、全世界の中に。

(をばり)

よき人よ

よき人よ來れ

よき人よ來れ

私はあなたの來るのを待ちくたびれて居る

あなたの力が加はることで

我等の仕事は目ざましく成長するのだ

よき人よ來れ

よき人よ來れ

(武者小路氏雜三百六十五より)

國際語 에스ペ

ラント常設講習

新學期(月火水金午後六時ヨリ二時間)

第一學期 一月十一日ヨリ二ヶ月間

第二學期 四月十一日ヨリ二ヶ月間

第三學期 七月十一日ヨリ二ヶ月間

第四學期 十月十一日ヨリ二ヶ月間

東京市神田區表猿樂町二番地

日本 에스ペラント社

電話 神田 四七八五
振替貯金 東京五一六一三

内外 에스ペラント書籍發行販賣

エスペラントニ就イテ

知リタイ方ハ!!

我國ニ於ケル普及中心機關

日本 에스ペラント學會へ

『レゾオ、オリエンタ』毎月發行

會費年額 二圓四十錢

東京市牛込區新小川町三ノ十四

大正十一年十月十日印刷
大正十一年十月十五日發行

不許	復製
----	----

定價 壹圓
郵稅 六錢

發行所 東京市神田區表猿樂町二番地
 豐川善曄
 川原次吉郎
 代表者 押田德郎
 東京市牛込區通寺町六九番地
 山本長壽
 東京市牛込區通寺町六九番地
 文長社
 東京市神田區表猿樂町二番地
 日本エスペラント社
 電話神田四七八五番
 振替貯金口座東京五一六一三

日本エスペラント社發行書籍目錄

獨習用改版エスペラント全書(厚ク) 定價 送料
 教科用(ス綴) 一、五〇 二六
 同上練習例題解答集(説明附) 二、五〇
 エスペラントの手引(エスペラントの鍵) 〇、五〇
 エスペラント教科書(短期講習用書) 二、二五
 同上講義録第一輯 一、〇〇
 エスペラント模範練習讀本(解説附) 二、二五
 イソツプ物語(詳註附) 四、五〇
 レツシング物語(脚註附) 二、五〇
 エスペラント助辭一覽(小形本) 〇、五五
 東洋白珠集(PERIODICAL TAORIENIO) (和漢模範文譯) 四、五五

日本エスペラント社

東京市神田區表猿樂町二ノは三一・電話神田四七八五・振貯東京五一六一三

大成日エス辭典(印刷中) 二、〇〇
 大成エスペラント和譯辭典(薄ク) 二、〇〇
 羅エスペラント和譯解剖學名辭典 一、五〇
 (薄ク) 〇、五〇
 エス日及日エス海員語辭典(薄ク) 六、〇〇
 エス日及日對照會話編(印刷中) 〇、〇〇
 エス語人文典第一輯(助辭詳解) 〇、〇〇
 (前置詞) 〇、〇〇
 SAIJIME(千布氏譯)(口繪寫真版入) 四、五〇
 高等エスペラント教材(講習用) 四、五〇
 同上講義(上卷) 〇、五五
 作詩法講義 三、〇〇
 エスペラントの榮(宣傳川)百枚 三、〇〇
 【切手代用拂込紙】(増) 〇、〇〇

文藝雜誌

原草

每月一回發行

發行所

東京市本郷區元富士町

草原社

(エスペラント文藝記事毎月掲載)

大正十四年六月

エスペラント書籍販賣

内外圖書雜誌直輸入元

四方堂書店

本郷五丁目

振替 九五五六
東京

商出入輸

取扱項目

農林産加工品	殺蟲粉	器具藥品	農作園藝用	輕便發動機	農工用小型	トラクター	耕作機械
--------	-----	------	-------	-------	-------	-------	------

旭光社

東京市芝區濱松町三丁目一番地
電話 八二一番 二八七六番

時勢に鑑みエスペラントを以て通信す

レツシングの寓話

川原次吉郎編著

日本エスペラント社發行

(定價二十五錢)

レツシングの寓話はイツツフ以上に簡明にして、しかもギリシア的理想の色彩と比喩と詩的情緒とに依りて結ばれたる理想と藝術と教訓との表現であります。それを川原氏が原文(獨逸文)を照合して、最も完全なるエスペラント譯に詳細なる註譯を附したる書であります。此書はエスペラントの獨習書としても、又教科書としても最適な書と思ひます。(莊郎)

323

446

終